わかたして。

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
わかたして。

【Ｎコード】
Ｎ１５７１Ｚ

【作者名】
白紙描写

【あらすじ】
主人公はどこまで世界を動かせる力があるのか。その疑問をぶつけるために必死にもがく物語（わかった。本気を出して上げよう。「とりあえず、バカみたいなノリで女の子と付き合わせてください。」

始まり、。

どうしてだろうな。どうして上手く行かないんだろう。

なにがきっかけで上手くいくのか分からない。

何一つ変わらない。現状。

もはや、手遅れなのか。そうなのか。

どうだって良いのかもな、他人ごとで済まされるんだよな。

よく分かったよ。人生なんて、有るだけ無駄とよく分かった。

もがいても、必死に進んでも上手く行かない。自分だけじゃないはず、きっと報われない。

一生ずっと、報われない。地獄と同じだなこの世界なんて地獄同じ。

気持ち悪いだけ。

意味がないだけ。

どうでもいい。もうどうでもいい。

誰か。頼むから、誰でもいい。

見つけてくれ、見つけてくれ。

無理無理そんなの無理。出来るはずがないじゃないか。

一生は死ぬまでずっとだ。

死んだら楽だろ。生きるのが辛いんだ。だから必死に生きて、苦しむよ。

、期待できない。（前書き）

登場人物かも

一ノ目一時（いちのめ　ひととき）

境地銃（さかち　さとる）

支持子子子（しもち　ししね）

只今三名

、期待できない。

正直な所。まだまだ、俺の実力を知らない人間が居るようだな。

教えてやるよ。俺の実力を…

新世紀末期のこのご時世。誰もが、自分のことしか考えず、自分中心で地球上が回転しているのだと、言わんばかりなこの時代。

「シャーペンの芯をヤンデレの女子高生に、投げつけてやる！」

この場合のヤンデレは、ヤンキーなデレを意味する。

授業合間のひととき。

『一ノ目一時』は、大声と罵声半々で教室中に声を扇いだ。

凄い勢いだとは思わないか？

想わない。

俺はひょっとすると、中学生で受験生だ。

受験勉強と名の知れる絶対的境地。

に、立たされている。

それを観て、まぶだちの『境地銃』が

「凄い勢いだな。お前一人で、全国統一出来るんじゃねぇか？」

とほざく。

距離にして、八メートル。ぜんぜん聞こえない。

今世紀最大の冒険が今始まる。

この物語は、爪楊枝と杓文字とタワゴトと友情と遊女と崩壊的な勢いで、全国統一を行う物語だ。

まだ始まってはいない

新世界が見えた！

本当お困りな一時さん、今日も危険でいびつなオーラを羽織っている。

さとるは、いつもの席からはとを眺めるように、一時を眺める。雑巾とスリッパを持つながら…

「この場合、俺はなんとリアクションをとればいいんだ？」

さとるは、満面な笑みでこちらを凝視する。

怖すぎて、一時は体調不良に成ってしまいそうな域に達しそうだ。

大丈夫です。一時は、毎日体調不良な趣を魅せているから…

「雑巾を頭にがぶり、スリッパを使って、自分の頭をたたくんだ。そうしたら、頭がハッピーエンドするぜ」

この案は、暇を持て余す授業中に考えたヒトトキの案だ。

「ハッピーハッピ、ハッ八ぴー」

面白くもない。

言われるがまま、サトルは、頭を叩きつつ…

奇声を上げた。ハッ八ピーと…

「授業中だぞ。お前等、静かにしろ！」

と先生が怒鳴るが…

「先生…雑巾をスリッパで叩いてるだけです！誰も悪くありません！」

と僕らの味方、子子子は正論を並べた。
勿論、スリッパで雑巾を叩いてるわけではなくスリッパが雑巾に叩かれているという意味を孕んでので言の葉。

子子子は俺の嫁候補だ文句は、感想で言ってくれ。

「そうか。シシネ掃除長がそこまで行ってしまうのなら、致し方、わたくし先生も、先生が悪かったと言わざるを得ないな。済まない、ヒトトキ君、サトル君」

先生はチョークを阻んで、謝る。見た目、目線を遮るかの様に見えたその行為は、バカにしているとしか思えない風格だ。

「土下座しろよ。センセー」

わずかに、中学生まで残していた三十センチ物差しが役に経つなんて思いも寄らなかった。定規ですね。

土下座できない先生は、ただの公務員。
生徒に土下座できる先生は端っからの羞恥知らず。
俺的には、羞恥知らずな先生が良いな。固持的私的だけど…
と思ったのは、サトルの方でヒトトキではない。
「早くしなよ。先ん生」
と産声混じりの産声抜きな声をはびこらせ言うサトル。
「…」
圧倒的な権力の指圧を架けられる先生は、なすすべ無しと来たもんだ。
先生には、昔、夢があったらしい。
ずっと昔だ。
先生が今のサトルやヒトトキのように、無邪気なじゃれあいを淡々と貪っていた時だ。時代。
先生の過去…
…おれ、大きくなったら、漫画家になる！
…え、良いな～俺なりたい！
島らま戸町とは、よく遊んだな。覚えてないけれど…

…バカ言え。俺が成るんだ漫画家に！
付け足して言うのなら、爪楊枝と墨汁だけでだ！！

…負けたよ…

島らま戸町は、よく諦めていたな。思い出す。

「私の負けだな…」
先生はゆっくりと、膝を下ろす。

期待はずれは免れたい。確信が持てるくらい先生が土下座をするのを信じたいと願う子子子はそこには居た。

クラス中わめき声しか、高らかと発していなかったはずなのにこんな時だけ、沈黙が発生するから…世間というモノは、ともシシネは思った。

けれど、ここは、この世界すでに、根本的な常識が狂ってるため、世間体もすでに無害。

先生は瞬く間に、学校のタイルと表面にコーティングされた透明体の表面に膝をつかす。

「先生はやる気のようだな。何つぅか。ホットしたと言うより安心した。」

とサトル。

何に？

何かは決まっている。これが現実で現実に出来るの世の中にだ。

ほっとため息をつくのも、俺とサトルと子子子だけ…後の残りは野次。範疇でもない。

膝をつかした先生は、今度は両手を学校の教室の床に起き始めた。無論勿論、土下座だ、これはそう、一種の習わしの様なものだ。四足歩行を繰り返すのではないかと言うくらいの態勢に陥っても良かろう。

いや違った。このまま、潔く土下座をしてくれるのだろうと言う淡彩な簡単な思いだけでは、そう簡単に土下ってくれなかった。先生はピタリと、動作を止めたのだから…

それと、連動して。

口が蠢く。

「だがしかし。一つ言わせてくれ、これは遺言や言い残す言葉と同等の意味付けだ、決して意味深で逃げ隠れするようなことばてはない。頼む。言わせておくれ」

ねだる。先生は哀れな眼差しでこちらを見る。

死ぬ訳でもない筈なのに、必死だ。

「どうする？

サトル」

堂でも良いことなので、まどろっこい選択はサトルに任せようと思う。

相変わらずと言っては何だが、サトルは相変わらず、清潔感のある潔白な雑巾を頭に乗せている。

「いい、良いよ。」

その通り肯定だ。

先生は、何かを決したかのように、何かを語り出す。

「先生さ、昔から先生になりたくてさ、…」

それは嘘。本当は漫画家になりたかった。これは子子子情報。

「それでさ、ずっと、ずっとずっと、先生が出す問題から授業から宿題まで、ずっとこなしてきたんだ」

それは嘘。ずっと、落書きばっかり書いてきた。

「そして立派に、先生になったけど、先生の人生は」

「…」

「…」

「…」

「無意味なモノだったと、言わせてくれ、無意味じゃないと言わないでくれ、無意味だなと言ってくれ、意味がなかったと自覚さけてくれ」

「これがおまえ達に言いたかった。正真正銘の授業だ。」

土下座をする。先生一人。

書くのも焦り

翳りに浸られた教室は蛍光灯で明るく照らせれていた。いつもの変わらぬ風景は、世ほどのことがないと、乱れない法則に従っている。

今のこの現状は余ほどのことだと言える状況下である。

先生は生徒に不服にも虐げられ従えれていた。

現状を維持するのは簡単。変えるのは難しい。俺たちはその異様を成し遂げたのだろう。

だが決してこれは、偉容では無いことだけは確かだ。

「しっかし。先生も先生だよな、授業を自由にしてくれるなんて…」

お前たちクラスには、授業なんて物を必要ない。だから、一緒に先生の失ったはずの時間を取り戻してくれ。

なんて、腹をくくるも、先生らしさは残る言葉を言い席を譲ってくれた。

この場合の席は、教卓と生徒用机だ。

「センセーは野次と戯れているようだし、撓めてるし。よろし良いのではないか？」

俺の言葉だ。

よろしく無いのはこの狂った世の中。先生も義務を忘れるこの世の

中。

期待され期待されない現実と一緒。

つまり、矛盾が世の中。

「観ろよ。先生楽しくやってるぞ」

先生は、鉛筆と紙と野次達とで、スゴロクパーティーを始めるばかりだった。始動される。

「嗚呼、貴方達ったら、陥れたり、新しい秩序を作り出す事しかできないの？
もっとまともに生きていたら、良いこと有っただろうに…」

残念がるのは、死期ナ梅雨。
みんなは梅雨と読んでいる。

梅雨は神出鬼没なあげく、怪しい携帯サービスネットに手を出すまでに至ったお人だ。

別に悪い人ではない。常識の範疇で歪んでいる人と言おう。

「あ、梅雨さんお元気立ったのですか？
先日は、空き巣に有ったとかでゴタゴメ立ったんじゃ…」

サトルはよく覚えているな。俺は忘れていたけど、今思い出した。
促された。

「嗚呼、大丈夫よ。その共犯者を正当防衛で殺めて、ついでに、当

事者を連行したから…」

凄い。僕には真似すら似合わない事情だ。
それはそれでよしとしよう。人には人の個性とやらかな？
そんな物ばかりで溢れてんだし、

人金物情報に埋もれた世界ですよ。
全く、

「梅雨さんはお茶漬けに、つゆを投入しますか？」
投げ込むように、入れたりしないよね？

「少々」

やっぱ入れるんだこの人、とサトルは思ったと同時に隣のおれは…
答えて応じる人もそうだけれど、投入しないでしょう？…梅雨さん
何処のにその狂言が隠されていたか。始まりは、サトルの投入の一
言。

今期に入って、色々いろんな事柄に直面してばかりだな。
例えば、割り箸の割り箸の大量生産がストップ。
既に手遅れだと思われていた地球温暖化ストップ。
アナログ放送再開。空気主力軽自動車水陸両用かに成功。

「お前変わってるな。ケチャップやカスタードなら、まだしも、ツユはないんじゃないかな？」

自分で訪ねて置いてその言い草はけしからんとは思う。
ある程度、サトルのセンスや性格は知っていたけど、ここまでエグる様な毒舌は初めて耳に入れる。

「ケチャップは合う人には会うって情報源のナクラナシラバシトナリげイドって番組で視聴したけど、カスタードは知らない。あと、ツユはよく合うし馬鹿にしない方がいいわ」

この人、情報が全てだと思っているけど、その通りかもしれないって、場面も人生上結構合ったから、その思想に否定は出来ない。俺が居た。

「へ、お前知らないのか？
何処かの奇人がお茶漬けにみりんとカスタードを入れて混ぜ混ぜして、食ってたって話を…」

「それはデマね。」

情報伝達の早い奴らだ。俺には到底適わないが…

「それより、何しにきたんだよ？
事情がないのなら、不登校っとけよ」

俺の言葉。正直本音を叩きつける。

学校の教室は、澄んでいて穏やかではない、何故なら先生と生徒が戯れるのが雑音にしか成らないからだ。
過半数は、遊んでいて、残りは読書ゲーム携帯慣れこなしテク紙飛行機使い丸閥ゲーム電卓など、様々だ。

その真っ直中。梅雨は

「事件が勃発したの、幼稚な意味で…」

と言いだした。
俺には関係ない話し。

「大変だね。梅雨　子ちゃん私がどうにかさせて上げようかぁ」

清掃委員長の子子子が現れた。彼女のキャラ設定を知るものは誰もいないと聞く

梅雨の背中にのし掛かる。
体重と重力で弾圧をかけようとしたのか、上手く行かずに跳ね返され、黒板のチョークとか置くところの角に頭を激突する子子子が居た。

瞬きを行う際の出来事で、何が起きたのかは、三割しか理解出来ていない。

「大丈夫か！？　シシネさん！」

甲高い棒読みで、視線だけを子子子に向けるサトル。興味がないのが分かる。

はっきり言って俺も興味がうつらだ。

「いた、い…」

痛いらしい。激痛以外の情報は得てないため、ここで梅雨は

「痛いのなら、痛いだけの事よ。」

その通りか、もし当たり所が悪くて、昏睡状態に陥っても、情報不足でただの気絶か、眠っているだけと判断するのが妥当。打算見積もり。

「髪の毛に、チョークの粉付いちゃった、梅雨さん、粉をのけてよ」

痛々しいくらい頭の上がぱっくりと開いて、頭蓋骨が見えた。

というのは嘘で、省がありませんことなどとほざき。頭を叩く梅雨さん。

テキトウという名の本気

頭にホコり
と言うが強ち嘘ではなかったらしい。真実を語っていただけらしい。
弱小な打撃を与える梅雨さん。
微動だにする子子子。
「何事もなくて何よりだよ。何事が起きたとしても楽しかった筈だけど…」
心なしか、サトルは作者のような意見を述べる。
しかし、一瞬の出来事だったし、対処も終え次の話題を持ち出す良い言葉はないか。とか思っている俺が居るし、子子子さんの存在感薄さにはびっくりだ。
世界統一まで何百年かかるか分からないペースで進んでいるよな。
勢いで書いて、尽きたって感じがしてきた。
多分恐らく、こんな結末に成るとは誰もが知っていそうだ。
それに、作者と来たら発想が貧困すぎて話に成らないし、話も作れない。参ったものだ。
「酷い言い方、後で、何かして悪戯してやるんだから！」
子子子は元気がいいな。威勢がいいのか？キャラも最初の当時と雰囲気違うし、…やっぱり、作者はキャラ設定やシナリオ作りが下手

くそな奴と分でも間違いなさそうだな。

適当な悪者を登場させて、主人公が倒していく…だけでも十分盛り上がるのに。

何時までも何時までも、無駄な会話や無駄なアクションを取り入れる…

ま、これも仕方ないだろうね。精神が崩壊する寸前まで来ていそうな感じしてるから…

「悪戯とは、何だ？
もしかして、貴方…」

横で話を直聞きしていた梅雨が疑いと訝しげな表情をし、ついでに眉を細めた。

「べ、別に、邪でいかがわしい事なんて、考えていなんだから！」

吃驚マークをよく使う民だな…まるで、一昔前のメールでも観ているようだ。

これは俺の思想。一々言わなくても良いのだけれども、一々言わせてくれ。文字数の反節約だ。現代人はアンチと言うのか？

「顔が赤くなっているぞ。しかも、旧石器時代のアニメのような感じで…」

旧石器時代、昔の人は、暇なとき、何を遣っていたのだろうか？
野球とかして、青春の汗をかいていたのかな？

スポーツで区切った方がいいな。スポーツをして、友情でも深め合ったのかな？
小学生の頃、大半引きこもっていたから、アウトドアな関係は知らない。

正しい意見は出来ない。

「何よそれ、まるで私が薄っぺらい箱の中に入っているようじゃない！？」

旧石器時代のテレビは画鋲で貼り付けていた、を定理してくれる一言だな…
俺の力学的では証明難しいが。

「聞こえなかった。なので、ひとまず、子子子は子子子らしく、梅雨にありがとうの一言を伝えろ。」

頭のホコリを落としてくれたのは、梅雨。
ホコリがついたのは、梅雨が突き飛ばしたから。

突き飛ばされた原因は、いきなり、子子子が抱きついたから。背後。

全ての元凶は、子子子にあった。

正しい道筋だ。
それの結果として、お礼を言うに当たるのだ。

間違ってはいない。少しおかしいだけだ。

ヒトトキは一人でに、納得した表情を浮かべて上の空だ。

「何よそれ、まるで、私の頭をなぶってくれてありがとう。私は痛いのが大好きなの。みたいに勝手な解釈を寄付してしまうじゃない？！」

ヒトトキは上の空だ。

「良いんじゃないの？
別に減少したり、絶滅したりする訳ではないしさ…」

動画のロードを待ちながら、お菓子と飲み物を口にするのが最も幸せと感じる一時だったと、今感じた。

それと同じく、痛みを幸せだと思える自分が居たら幸せだっただろう。

「何でも良いから、とりあえず、つべこべ言わず、礼を言え」

相手の意志を尊重せず、結果を出すため促す言葉。
これで反抗するのなら、何も言わない。

「分かったよ。頭を叩いてくれてありがとう。梅雨」

素直にひねくれた態度を見せる子子子。
全面的に全部俺が操作している。
何もない。何か期待しない。全国統一なんてものも無理。諦めない事が肝心なように、諦めることも必要。均衡を取れないと、崩れる。崩れてしまうのは、不安定な組み方をしているだけ。

「貴方…変態丸出しね。情報だと、貴方家でお兄ちゃんのエロ本を

観ていると言う話が時より、聞こえるのだけれども、本当なの？誠なの？」

二沢ではなく、一沢で攻める。強制と言うけど、この場合は確信と名の知れる語句が適切。

人前で、しかも男子が混じるこの場でその話を振ってしまえば、子子も羞恥を感じられる事になってしまうな。

助けるにも、助けれない立ち位置。

「？とぼけた方がいいの？」

認めるのか。そうだな、俺と言っても俺たちと言っても、男性はわずか二名だし、後はスゴロクに熱中してるし、大した激震では無いのかも知れないな。深読みのしすぎ、人は思ってたより浅い。

「認めたゃいなよ、心配ないさ…何せ、お前のような年頃になると、好奇心、が煩悩じみて思い上がることもあるさ。」

文中に意味不明な言葉が渋滞していた。

日本言語はこれだから難しい。けど、何となくの解釈の確認はでは最強速度。

「う、うん」

困っていると言うより、めんどくさそうな態度。

「それでなんだっけ？

梅雨さんが何かに関する情報を持ち合わせてきたって？」

持ち合わせてきた。梅雨は情報伝達網、意味の流れだとそれで決を取るとしよう。

面白い話を期待しているよ。

「嗚呼、私にそこまで期待していたの？
残念だけど、今日も至って平凡な日常しか訪れないわよ」

情報を備えると、予知すら出来てしまうのか。

「もしかして、ここまでの前置きで『事件』と言っていたのは、この事柄を意味していたのか？」

察し良く、閃き良く、観察力を活かした返答。

「勿論ね。その通りよ」

幼稚な意味では、その通り幼稚な意味だった。

確か。

懐紙（前書き）

出てきた人

死期ナ梅雨（しきなつゆ）

用駄懐紙（よだかいし）

懐紙

三種の神器とは、狂気、鬱、無情を指し示し、どの箇所が欠けていても、何かで補えるを意味している。

「意味不明だ」

不適切不毛。業界用語でも何でもない。ただの用語。

曖昧で不可実な言葉に、基準を与えでもって何の意味もない。

「みんな、いろんな言葉を知って居るよな。俺は知らない」

今日は、昨日の今日だ。昨日なら今日は次の日だ。

自分を置いて、他の人たちは、いつも通り授業中な為、一応席には付いている様子。

こう、観ているとみんな分かっているのかな？

学徒は永遠じゃないことに、そして高校生だって、何時までも高校生では無いのだよ。

昨日のことは、忘れているような気配だな…

先ほどの話、狂気と鬱と言っていた話だが、鬱までは神器といっても良いが無情はあからさまに、無理矢理だと言いたい話だ。

強引、無情にもとよく使われる単元だ。

無情とは何か？無情とは、感情空虚のこと。

感情を持たない人間なんていない。感情は芸術や美術から成り立つ。
人間の感覚器官全てをつぶさないと、そういった言葉に該当しない。

物事出来事人事、曖昧で模糊。
人の知恵の一つに数字が来る…のか。

しっかりと、曖昧でぼんやりとしたこの世界でも確実な値を出せる道具。

人類、長生きするものだ。ここまで来ると、人類まとめて一つの単体のように見えて恐ろしい。恐怖。

だけれども、数字１から１０まであっても、足りない。記号を用いても不足気味。

例えば、こんな話。

セーブデータをセーブしたい時。
『セーブしますか？』
と問われ。
『はい』『いいえ』
と並べられた選択肢が有る。
しかし、ここに現実の曖昧加減を加えると…

『セーブしますか？』

『はい』

『どちらでもない』

『いいえ』

となる。

「おい、ヒトトキ。起きているのか？目は開いてるが心は閉じてそうな感じだぞ？」

はっ、しまって仕舞った。

余りにも、今日が普通で平和ボケしてしまった。

「先生ヒドいです！
ヒトトキさんを虐めないでください！」

前にも一度、有った展開。前というより昨日。

「なんだ？お前は…あ、構ってちゃんの子子子じゃないか…なら、許すしか有りませんね」

本音、先生は俺の様子を伺っただけで、別に虐めているわけではなかった。
でも、考えて、考え深く考えると、先生が名前を挙げる行為は、周りからな視線を集めるという行為、仮にもし俺が視線恐怖症だったとしたら一大事。

そんなわけないけど。

明日は水曜日か…
そろそろ、杓文字を使ってバトル展開になっても良い頃合いだが…
そうは行くまい。

「おい、サトル。ゲーム持ってきたか？」

用駄懐紙。華かな面持ちの生徒副委員長だ。基本不真面目。成績優秀。授業態度怠り、なまける。でも、成績運動共に上位。

才能だけ無駄に持っている。

けれど、女子にはモテない。

「ゲーム？あ、ゲームね。」

昨日から、頭に何か物を乗せるのに目覚めたサトルは、今日はタオルを乗せていた。

恐らく明日は、ハンカチかポケットティッシュだろう。予感。

「あれ？おかしいな。ちゃんとタオルにくるんで居たはずなのに…」

教えてやるか、サトル。答えは墜ちた。

頭上のタオルに釘付けな俺は、それしか、無くなる方法はないと思った。

「しっかりしろよ。お前自身のゲームだぞ？

僕のだったら兎も角、お前の物だったら、こっちが残念だよ」

自分の事はどうでもいいのか？

自分の私物だったら、どうでもいいのか？

つくづく、懐紙には、驚かされる。昨日も懐紙は学校の雑用とかで、授業をサボっていたからな。

ま、頭が良ければ授業なんてやらなくても良いし、やらない方がいい。

自分の為に使うべき時間を、使った方が一番有効だからな。

「う、有ったぞ。懐紙、」

どうやら、有ったらしい。

リョックサックのような鞄から、薄いゲームパネルを取り出すサトル。

不覚にも、俺はサトルの本領知らなかった。いや知るよしもなかった。

知ることは出来た、『サトル』って名前。名前が重要なヒントだった。

「有るじゃん。無くしてなくて、良かったね。」

サトルは、電子機器に飢えている。

ほとんど、盗み聞きな立ち位置にいる俺はサトルを監視してみた。

家で何をやっているのか、殆ど皆無。

予想は付くと思うが、俺は別に嫌いではない。

だって、俺を差し置いて、一人でに楽しむことが許せなかったからだ。

ヒトトキは、貧しい家庭に育ち、何とか毎日を生きている状況だ。

これは人には内緒の、ヒトトキだけの秘密だ。だから、こんな学校

まで来ているのだ。

結構な距離だが、近代化の進むここでは、わずかに三分の差で、何処でも同じ距離なのだ。

神速機器とか言ったり、神様の乗り物だったり、人は言うけど、大した発明ではない。ただ単に登場するのが早いか遅いかの差だ。

今の俺の現状と同じ、貧しいか貧しくないかの差。
馬鹿にされるのはかまわない、けども、優しくされるのは好まない。

全国統一、冗談でも良い。上手く行かないのならそれで良い。
世の中上手く行かないのが証明できるから。

もし上手く行っても、人生そんなもん、上手く行ってしまうものと立証できる。

「先生、彼らのゲームを取り上げてください」

心無しに俺は、懐紙が手に持つゲームを指差す。
非道いのは、俺の方だ。
綺麗なのはみんなの方だ。

「？ああ、あれね。先生、懐紙さんに逆らえないから、無理」

ここは、この世界ではルールよりも権力が勝るというのか…
一つ理解した気分。

「ヒトトキだっけ？」

ゲームをしながら、首だけをこちらへと向ける懐紙。
何かを覚悟。

「いいね。ずっと、君に注意を見計らっていたけど、ずっと良い人じゃん」

黒幕は、彼だったらしい。
今日で二つ理解した、世界は才能を持つ人たちで動かされていることに…

知れないを知られる（前書き）

出た人

神灯（かなでり）　日美夜（ひみや）

知れないを知られる

擬人化して、人を殺めたいのか、戦争を起こして、人類を滅ぼしたいのか…

この本に書かれている、物語。
一見、真実にも見えるが言っていることがめちゃくちゃだ。
嘘みたいに、本当、良く出版できたものだ。努力家の面影は見える、けど、正しい物、有力加減が見えない。

「嗚呼、この本ね。結構面白かったよ。」

本を渡す。相手は、日美夜。神灯　日美夜とは、何となくの縁だ。
友達だったりするのかな？
ま、知り合い範疇の仲だ。

「次、は何だっけ？」

授業と授業の瀬戸際。つまり休み時間と言えるこの時間。
そして、次の授業タイトルを聞き出す際のジェスチャーと言葉。

「利文学」

何事も一言で済ましてしまう。圧倒的な小無口人間。通常日美夜は何処にでも居そうな文系女性。

ここで言っておくが、利文学は、魔法みたいな奇天烈文章を長々とそして淡々とまとめた瞬間理解言語だ。

別に、一般生活の要に成るほどの重要性は無いが、担当の先生が言う限り常用性が有るように聞こえるのが不思議。

「嗚呼、助かったよ。わざわざ、確認を取るために、廊下に出ることもないし…あと、お前記憶力高っ」

教室に、そういった掲示がないのが、一つのストレス。

文系と言うだけ有って、やはり、記憶力も確かに備わっている。

「…」

無口に、左手の甲を見せる。

「ん？魔術親書、壱拾七の印か？」

利文学の独特のバーコードがそこにあった。

「え？」

よく見れば、理解できる。端から見たら、単なるマークだが中三にもなった、俺たち三年生なら殆どの人が理解でき、確認する。

理解した、文は、事細かに、カレンダーと祝日、行事表、時間割り、あああ。

凄ま過ぎる情報量で頭が熱を帯びて、思考が破裂寸前まで、追い遣った感じ。

まるで、連続する爪楊枝工場の爪楊枝を頭に物理的に詰め込まれて

いるようだ。

「日美夜。冗談、痛い」

日美夜の冗談は、痛い物だと知った。

いつの間にか、日美夜は何処かへ行って消えたらしい。何処にも見あたらない。

変態質な日美夜の事だ、また何処かで監視したり、勝手に人の机の中へと本を入札するだろう。

気にしないが適当。気にするが非常。

…俺も、移動するとしよう。

学校の身なりは、至ってシンプルで南側と東側にとの二カ所にしか校舎はなく。

北西側に、学校の唯一の誇りの体育館が顕在している。見かけだけの体育館で、顕在はまさしく適切と言える。

クーラー配備の体育館。中身は、明らかに手抜き作業の賜物。

いつか、梅雨さんに、聞いたこと有るが後数年で自然陥落するらしい。没する。

体育館以外は空き地同然。何もなく、気休めの花々。プールは屋上。

トイレは二十七カ所。窓ガラスは千四百枚程度。

完全に把握し尽くしている梅雨からの情報源だ。

情報源はおかしいな言葉で、彼女の話から何となく聞き取り、何となく覚えているだけ。

サトル、懐紙から酷く避けられている感じだ。俺の発言ミスと言うべきか…

友達が消える感じ？

ま、普通、男と友達よりも女と友達が多くなるのがラノベならではだと思うが…

一つ提案がある。

あの二人組を敵に回す。

そして、勝手にバトル展開に持ち込む。勝てば、世界統一と言う快挙もまた一歩近づく。

なぁ～に、セカイ系の小説だ。きっと上手く行く。

力学が物理的力なら、人間関係は不可抗力的力。

ゲームと一緒だよ。

「取り合えず、こうだ」

メモ帳を取り出す。常時は身につけていないアイテムだが今日は水曜日だから、何となくと気分的な非物質と直感で持ち合わせている。

ケータイで文章書くの辛いな…

紙とペンで書いた方がぜんぜん早い。
この話は、ケータイと直筆との比較でそれ以外は該当しない。

「明後日、火事が起きる」

一人ぼやく。
これは、先回りの手段。今、廊下を歩いているのだが、周りに人が居ないわけではない。

絶対、少人数でも聞いている人が居る。絶対居る。

大抵の人は、変な奴…ですぐ忘れてしまう。それでいいのだ。

これは見せかけで、意味はない。
ただ、意味有り気に、意味の無いことをぼやきたかっただけなのだ。

何事にも、意味が有るといった人の言葉を信じよう。

すらすらと、メモ帳に何かを描いていく。

「意味がないのならだ…」

授業、始まり。

俺は、いつの間にか、孤独と黄昏ていた。
いつしか、言ってみたかった言葉。

この言葉を言うために、ぼやいたのだ。明後日は火事だと。
期待道理に、夢が叶った気分だ。
ラノベの世界だと信じよう。

「先生！ヒトトキが変です！」

やっぱり、反応してくるのは、真っ先にお前だよな。子子子。

「ぐがが、腹が…腹が！！！！」

下手くそな演技をする。題は、腹痛。属は仮病。

腰掛け椅子を盛大に蹴散らし、地べたで腹を押さえ、ばた足させる。

喘げなかったら、抱腹絶倒と笑い転げているだけ、

「あぁぁぁあ〝あぁ〝ぁああ…」

まるで、この世のとは思えないその容姿。口から意味不明な液体がたらたら。

「あいつ、浮遊獣奇に取り付かれていないか？」

ここで都市伝説が耳に入る。

「…」

黙る。さっきまで自分を忘れて黙る。

「ざわざわ」

今世紀になっても、ざわざわと鳴る雑音は顕在するのか…

「済まない。何でもなかった」

体を叩き、埃を落とすフリをする。

実際に、俺は何かに取り付かれているのかも知れない。

いつも通り、授業を受けた。

勝負ごとは上辺ごと

ヒトトキは、恥をかいた。

初めからだ。初めから恥をかいていたと、そういう事だ。別に羞恥なんて、受けても結局は、時間と共に消え失せるし、一時的な何かと課題すれば、怖くもない。怖くなんかも無かったが、

「お前、さ。すごいな」

と、

授業も終わったからと言って、気軽に話しかけてくる懐紙。

何気なく、気なさそうには見えない態度で話しかけてくる。文献を片手にもち、筆箱を脇に挟んでいる姿など、幾分、可笑しな姿と言えよう。

「お前さ、頭いいくせに、何かがズレているよな。」

詰問とは、また別のただの質問。

「悪く思うなよ。俺はさ、少しばかりは、自分に自信があるんだ。だから、そう見えるだけ」

話しがかみ合わない。俺自身、おまえの方がズレていると突っ込んで欲しかったのだが、こいつは授業も聞かず、さらには周りの事なんてさらさら興味のないことに一目すら置かない。そんな奴なんだろうな。

サトルと仲がいいなんて、それだけで、奇人確定なのに…

「悪く思わないさ、お前自身…いや、本人か、本人なら他人の事など動くものだと思っていた方がずっと賢いぞ」

悪魔のような秀才生、生徒会だったか何だった知らないけど、ここは悪口めいた褒め言葉を票すに限るだろ？

「そこまで悪くないさ、人費だろ？ーただし、他人なだけだ。」

ただし、他人。人を他人と関係ないような言い分。痛い目観るだろ。こいつ、

「あ、そうだ。これも何かの縁だろ？もともと、おれがしたかったのは、混沌と沈黙だから、お前邪魔するなよ？」

先ほどの錯乱状態は、試しだ。あくまで、自尊心が高ぶるお年頃の末路ではないよ。多分、だいたいだけど。

「縁か、お前単なる、近年まれに観るあれだろよ、あれ」

縁が先に飛びついたか、定めと言ったら全国統一も図られそうだな。

ここはよし、

「勝負しないか？」

近々、こういう企画を立てようと思っていたから、良い好条件だ。

「勝負か、何を見積もる？」

賞金っていうことだよな、賞金。

考えはまとまっていなかったし、計算無しの考え無しの宣言。何がいいか…

「学校を休んでもいい、と言う賞金でよろしいか？」

一般的に不登校。強制しているのと同じ。勝者に休む権利など、微塵もないから、これは賞金がないというより、勝者に対する閥ゲームだ。嫌がらせ半面。

「学校を休むか…何上。ゾクゾクさせるものがあるな。その条件乗る」

こいつはヌケているんだな。わかる。それと同時に、当人もそれの血を引いている。

「そして、種目ですけど」

「テストなどの点数だろうな。不利有利的な意味で…」

中学生らしい。

ばかばかしいと言うより、愚かしいが何倍か適切。

こいつも俺も、義務をまだ終えていないが為に、反抗的に…何もかも、見えている全てに反抗しているのだろうな。自覚らしくものは、自覚しているがそこも反抗したいな。

「なんだ、全然普通で驚きましたよ。」

「脅かすつもりは、無かったけどな」

スポーツなんてそこそこ出来ないから、文系で遣り繰りしていた俺でも、彼に勝てない気力しか起きない。彼は才能があるから、

特別な奴。

「じゃあ、わかった。俺たちが選ばれた負け組ってことを教えてやるよ」

選ばれし、じゃ無いところがツボ。

「なら、こっちは、当たり前のように秀才な醜態を晒すとするよ」

今後のライバルか…違う。天敵だ。

サヨナラが開始の合図となる。

「懐紙、サヨナラ」

「ヒトトキ…またいつか」

同じクラスで、口も顔も合わさなくなった。それは、勝負の始まりを意味していた。

ここからだな。

次の期末試験まで後二週間ちょいあり、まだ一学期も終わっていないということを表していた。

今から頑張っても、根本的にもう手遅れと言ったところまでの成績予感と言ってもいい。非常に難解な授業の連続ともいえる。

にわかにして、どう敵を陥れるか…

そこが重大な鍵となっている。

人を使う。人は一人では生きられない同様に、人一人では何も出来

ない。
これが俺が知っていた、よく言われる世界だ。そこで、申し分有りぎる俺は、人を頼るよ。

「子子子」

シネネなら清掃委員だし、A型だから几帳面にノートマトメているはず。
それとなんだか語るのも辱めだが、友達だからだ。信用できる。

「なにー？」

好奇心と無邪気が似合いそうな彼女でも、立派に兄さんのエロい本を吟味しているのだ。拝見か、見解か、懸崖か。

「ちょっと、頼みたいことがあるんだけどさ…聞いてくれるか？」

「うん、問題ないよー」

席が移り変わって、前の席に彼女が居る配分。別に授業中だからと言う状況下で話を持ち込んだわけはない。今が授業中だから、今みたいな状況が出来上がってしまっているのだ。

「今日から一緒に、テストまですごそう。」

計算尽くしの頭が冴える一口。
開口この方一言が聞き入れたのであろう、少し強張った表情をしたが、一瞬でその緊張感を決壊させた。

「うん、いいよ～」

ノリが良い。今日の子子子は、鈍くこけているようだ。反応がなんだかイマイチ。もっと発狂とか、交えて喜んでも良いのでは、…人のことベラベラ、思うのも悪いかもだな。

「あと、本題は、勉学の方にあるから…」

遊んだりなんてできない。そこまで暇でもないんだ。戦争だから、良いことがあると信じていたら、ダメなことしか起きないのと反作用して、駄目だらけだと思う込んだら、有効な局面も見逃す。つまるところ、どっちもどっちと言うことだ。

信じないことが一番の近道と…

鋭くも何ともない言葉。どうせだれもこの言葉をろくに理解もせずに、聞き流すだろうな。

「そうね」

無愛想に成ってないか？眠いのか。

知多感じだと子子子は、こくりこくりと頬杖をずらしたり、戻したりしていた。

今の所、そっとしてあげるか…

俺は、いつもながら、勉学にははげくまなかった。

適性てき、耐性がなかったと…言えば良いわけになるけど、あの先生の授業は、麻酔粉だからな。

俺も眠くなるわ。

斜め前に懐紙はいる、斜め前と言っても、結構奥の方にいて、ここ

からだと頭しか見えない。

「あいつ、ゲーム遣ってる」

「

誰も彼に文句をいえない。そのくらい彼は、歪な力を持っているのだ。

太刀打ちできない。

急激な熱量に完膚

親戚だと思えばいいのか。別に気にすることはない。
高が中学生の戯れだろ？

さて、

「今日はこれでお終いっと、」

授業終わりの合図と共に、教室備え付けのスピーカーから音が鳴る。
授業終了の合図だ。

ヒトトキは、ほっと一息ため息を付く。ここまでの披露と睡魔との
戦いのせいが理由だ。

今日はホントに色々有ったような気がする、当然、色々有ったけど…

キチガイ地味たエキセントリックなパフォーマンスと、

いかれてキチガイな懐紙との戦闘。実際には戦ってすらいないが、
あれは戦っていたのと同じだ。

圧倒的な世界のセマサに驚いたのも、その時。

「あいつを越えれば、世界中を笑いに満ちあふれさせるのも、造作
もなさそうだ。」

一声、独り言だ。

でも、その通りかもしれない。あいつはあいつでそれだけの力を持っている…
実感させるもの、雰囲気。成績。身体能力。日常生活皆無。
これだけ、並べれば、こいつがどれだけ優れていて、その能力を許容するスペックがどこに存在するのか？も含めて、選ばれた人間かを知らしめられるだろ？
日常生活皆無とか、そそるし。
「ヒトトキさん？」
今回も周りを観ていなかったらしく。目の前の人影も察知していなかったヒトトキだった…
ここでの対応、なんだ？、もしくは、どうした？険しい顔をして…
「どうしたんだい？訝しげに険しい顔をして、なんだ？俺に用があるのか。有るのなら、顔でも叩いてくれればいいのに…子子子さん？」
いつもなら、ヒトトキ君で呼ぶはずなのに、今日に限って、さん付けだ。
「ヒトトキ、一つ聞いても言い？」
なんだよ。回りくどいな。率直で頼むよ。
「聞かないはずがないだろ？」

「え、ああ、そうね。本題に入らせていただきます！」

テンションの変わりようと口調の変わりよう…
いつ、こんな高度なテクニックを身につけたんだろう？
まぁ、授業中にも決まって、異変事に声を出すのは彼女だから、多分、それとこれとは同じ用途なんだろう。

聞く耳を立てる。

「うん」

「それでね、どういう話しなのか。さっぱりわからないのよ。何が？狙いなの」

主語が抜けているが大分、大凡理解は出来る。テスト勉強のことだろ？

な、子子子さん？

「別に、大した狙いとかは無いよ。ただ、俺は一緒にテストを遣るだけさ」

「テスト？」

あ、この話しまだ深々と話していなかったな。

「テストとは、期末テストのことだよ。シシネくん」

決まって期末だけに限られないし、区切られない。

「ふ～ん、…で？、期末テストと共同生活がなんの接点があるの？」

馬鹿か！、馬鹿か…。

「それは…

「あ～、成る程、テスト対策修行ね」」

言いづらい言い方。

それでも、的を射ているから、九十点くらいか…

九十点ダイのテストの点数、四回しか取ったことがない。中学生に成ってから、

「はいはい、俺はどうせ、平均点数六十四点くらいの微妙な人ですよ」

修行曰わく、これはそのくらいの過酷な勉強に成るだろう。

「私、結構頭良いのかな？」

「十分いいです」

自覚しない分、下手な優等生より二重丸か。その言葉すら出さなかったら、花丸。

子子子は、清掃委員長と言われる地味なポイントをピンポイントで当てることによって、それだけで賢さを重畳しているのに当然頭もいい。

「理科の点数言って観ろよ」

「九十点、よ」

「誇らしい点数じゃん。決まり」

俺の夢は、誰もが日本語をしゃべれるより良い世界を築きたいそれだけだ。

なぜ、今更決意表明をしたのかは自分でもわからない。

「決められた!?」

「動じないくしてよ、テンションが痛い。」

と言うことで決まったのだ。

オヤジになんて言おう?

ま、恋人ですなんて言ったら頷くかもな。

興味本位で斜め前の懐紙の後頭部だけ観る。元気そうに、ゲームをしている模様。楽しそうに頭部が踊っている始末。

「あ、それと、エロ本読んだりするなよ。オヤジに怒られる」

小心極まりないが、これは本音で不本意だ。

抑えておきたいことだ。

「そ、そんな事するはずないじゃない!」

声がかすかに、揺れている。動揺とはこのことを言うのか。

動揺している、同情はしない。

「ごめんな、お前の性癖を理解してやれなくて…」

同情の言葉だが、顔はもろ無表情だ。遣ってられない感マックス。

「そ、そんな…急に、折り畳み傘みたいな顔されても…」

雨の日最適な表情だったのか。今の顔は…

梅雨さんから、この情報入手していなかったら危うく、俺が寝ている際に、鼻息尽かして、興奮していただろうな。

「兄さん…可愛そうだ…」

男性だからか、彼女の兄さんの方に同情してしまう。可哀想に夜も不十分に、眠れていないのであろう…

脳裏に、病んだ妹とニートな兄さんの構図がふと、よぎった。

ドアを必死に叩いてる、パソコンをいじってる…

「みんな、席に着け！今日もお終いだ。やっと帰れると、思え！」

切れの頃合いと言いますか…ちょうどごもっともなタイミングで教師たる先生が教卓にたたみかける。

あの昨日の土下座した先生がどれだけ、良くできていた先生か…、この熱の有る先生を見れば、一見にしかずだ。

「ほらほら、席につかんか！！！！」

どんな教育してきたんだよ。…いや、人らしい怒鳴り声と呼ぶに値するのか。

「お前ら、それでも、受験生か！！！！！」

怒鳴るの好きだなこの人。動物と同じだな。人は動物だけど、

ざわざわ

生徒等一行は、三度目の正直でやっと、席に無事を知らせる。つまり、着席。のだった。

「よぉし、ょし、それでこそ、三年一組だ。見込み道理の動きっぷりだぞぉ」

勝手な意見、イライラするほど、『よぉし、ょし』が犬をあやす様な発言ですばらしいと思った。

「んでだ、先生これから体育館でバスケのコーチングしないとならないから、この書類みたいな、お知らせの紙を自分たちで適当にとって、あとは帰ってくれ…号令！」

体育会系の癖して、説明がやたら長ったらしいうえ、わかりやすかった。個人的な意見だ。

ま、いいコーチングの人とお見受けいたそう。

早く帰りたいし、意外と気遣いや配慮有る先生かもしれない。

それはよしとして…

「起っ立」

ガラ

ガラ

「礼！」

と永遠の日直であるサトルが元気よく大声を出したのだ。

だいぶそろそろ

中学校はシンプルに出来ています。
なので、下校する際もなの障害なく、かつ迅速に門をくぐることが出来ます。

俺は、幼なじみでもない、それは偶々、三年生に上がるときに偶然同じクラスだった子子子と共に帰路を踏みしめていた…

「昨日の今日だけど、何かあったの？」

と俺の後ろをのこのことついて来る子子子は主語を挟むことなく質問した。

「昨日の今日？はて、なんの話しをしているんだい？俺はお家に帰るだけだけど…」

主語が無くとも把握はしている、長期お泊まり会の事だと思います。
今の場合

「その…長期お泊まり会のことで…どうして、それを思い立ったの？」

ここは、すべても打ち明けても良いが、けれど、今、その理由を言ってしまうと『利用された』と感づいて終うだろう。案外、勘の働く女だからな。そして、好感度低下の一途をたどる…

「いや、何となくだよ。最近暇だから…たまにはイレギュラーな事もしようかなって、思ってさ…」

イレギュラーな事これは三割がた本当のことだ。

「子供みたいな人なのね。…」

グサリ、呟き混じりの独り言のような一言だったがその一言が何ともいえない、僕の不安定な心を揺さぶった。石をぶつけられた…

予想通り、思惑通りにいかないな、やはり人の心は総てを掴めない。掌握。

「お前だって、お兄さんの下心を弄んでるではないか！お互い様だ。」

まだ引っ張る無様な俺様とはよく言う。

「それは個性だよぉ。個性、梅雨さんとかぶるのよ。私」

キャラの事か、今までのは、計算していたのか、計算と言うより化けの皮。

「成る程、でもそんな陰湿で陰気な表に出せないような趣味を個性として機能させるのは、ちょっと不味くないか？」

直で変態さんみたいな。けれども、変態さんなんて今時いない方がおかしい…

元気に見えるこの子も殻を割ってしまえばただの腹黒い奴だな。そこも含めて、俺は好きだな。

「キャラ作りは苦手で不器用なの、で、とりあえずバックとして、

その趣味を辱めとして、備えてる」
表に元気、裏に悪鬼てか。ボロい構図だ。
「そこまでする必要はないんじゃないか？表はともかく、裏までギミックをしのばせるなんて…」
逆に器用じゃんと、突っ込みたい。
あと、現在位置は住居と住居の何もないただの道。
「逆よ。表も裏も偽にして、いる訳じゃないの、裏が本当の私。で、表は反作用で構築されたの」
裏を隠すための本能的な防御姿勢か。よくいる人種だな。これが
「確かにそうだとして、何故あんなに、梅雨さんとフレンドリーなんだ？似たような正確なら距離を置くはずだろ？あの正確だから尚更…」
確かに、口にしてみれば、分かる。勝手に口の方が動いたが考えられた言葉でもある。
「あの人嫌い…」
あ、そんな感じがしたな。そういや。
「同じだからか…」
似た者同士か。

「私言うのも変な感じで違和感なんだけど、女の人って結構似たり寄ったりだから…競争戦だと、自分なりのキャラが必要なの」

そんなものかね…どちらかというと、みんな一緒みんな平等って形に成ったりが普通ではないのか？

あ、時代的な落差か。俺も古い人間だからな。

「そんな奥深な話は置いといて、違う話題にしないか？」

いつもならではの、分かんない話は止めましょう信奉だ。

「話しですか？」暫定

「話だ」

今まで、ここまで親密な話しをしたことがない。彼女を彼女として迎えると言うのなら、本当に嘘からでた誠に成ってしまうな。嘘つき口語と誠な本心。

「じゃあ、あなたの好きな人は誰ですか？」

「禁句だろよ」

「え〜??良いじゃないですか！教えてくださいよぉ！?」

あいにく、この話の結果は知っている。答えるのが間違えで何も言わないが正しい。

それに俺はそこまで暇ではないフリを押し通したいんだ。

空は蒼いよな。

「おい、観ろよ。天空に一つの町が広がっているぞ」
すかさず、当たり前なことをぬかす。
指を指して指摘する。
「当たり前じゃないですかぁ、あれは、トまシコですよ」
トまシコ、何世紀かに滅びた一族の名前。それがあの街の名前になるとは、英雄と称されたシカシカもびっくりだ。
世界観ネタはやめましょう。
「で、ところでなに？」
「ん？なにが「で、ところでなに？」なんだ？」
「交友関係を一進みしていい人…」
「分かりづらいから、わからない」
とぼけるのも大概にしろ！と言うような顔。でも絶対言わない。誰だか分からない確定しない雰囲気が好きなんだよ。本音
「ふーん、遭難だ」
今見える景色は、駅かな。
駅といっても、田舎高速といって差別化が進むほど過疎ってる。田舎は毛嫌いされているらしい。
「人間、最先端都市だったら、空にも住むのか…」

どこまでも、新しい物好きは人類のほとんどの人種に定着しているらしいな、いつまでたっても、変わらない田舎も田舎だが…

「私、天空都市出身なんだけど…」

皮肉を言っているつもりではなかったのだけど、そう捉えでもっておかしくない物言いだった。
ここは謝るか。

「トまシコ、出身さんごめんなさい。俺が悪かったです。どうぞ、その軟弱な拳で僕という下僕を殴ってください。お願いします」

一応、棒読みで無表情。

「嘆かわしいね。無様な貴様よ」

なんか、すごいタワゴト来たよ。

「と、冗談は置いといて、コクリ、え!?天空都市の住人だったの!?驚きです」

今度は、声に生気を込め、表情にゆとりを設けた。

「って、知らなかったの!?ヒトトキくん?」

正直知りませんでした、こういうの疎いもんで、しかも田舎者なので…理由はいっぱい存在するけど、

「あなたの住み場所なんて興味有りませんでした。」

一番正直に答えた方が味があって、俺らしいかな？

「そうなの、残念。次からは興味を引く様に努力します将来的に」

努力の方向間違ってないか？勉強しれよ勉強。勉強大事だぞ、将来的にそっち極めれよ。

と、携帯電話のような薄型のカードパネルを取り出す。

これは学校からの支給品で、この地方での色々といった経費をすべてまかなえるポンコツ品です。防水出はないところが、気にくわない。

ピッピ

ジュー

公衆便所によくにた作りの小型な駅。これは立派な駅で最大四人まで乗れる個室乗客列車だ。

主にワームホールを通ることが出来る近代の知恵。人類史の頭だ。

「勉強大事だからな」

確認の為の投げかけ。

「分かってるつもりで居ます」

丁寧に子子子は言う。

フニャラピタ

計り知れない勢いで、空間を進む。

進む個室の公衆便所は、一般常識じゃあ、考えきれない速さで空間を進む。

速さにしてどのくらいだろう？
飛行機よりは早いかもしれないな。

そんな事より、ここ狭いんですよ、実際。
密室とか、堅牢に空間を密閉しているからか、何か湿度的に違和感を感じる。
それもそうですしね。個室に席が有るだけでほかには何もなく、えっと、絵画のような風景画が一枚飾られているだけの殺風景な窓すらない個室ですし。

「家まで、十五分くらいですかね、家まで　直通ってわけではないけど…」

と、隣の子子子さんに言ってみる。

「ケータイゲームやってるのよ。だっまってください」

手厳しいですね。しかも、いちいち優しく言うあたりがさらに上手の厳しさ。
う？、この人、しっかり家の人にご確認とか取ったのかな？
さっきから、観ている限りからすると、全然連絡入れている素振りを見せないのだが…

メールと言う奴なのかな？
メールと言う奴で連絡。
そうかもな。

「学校じゃお前。ただ元気な奴だと思ってたけど、色々な顔持っているじゃん？
スパイとか、向いているだろ？成れよ。」
冗談が過度すぎて、真剣味帯びてる。
「かもね。あと現にスパイだし…」
「え、う、うん、にゅ」
変な語源語呂が零れた。スパイか、今スパイと言いましたよね？…
そんなはずない。ですよね。
そう。これも冗談だ。俺がシリアスに冗談を振ったから、彼女もまた、冗談で返したんだと。今は思う。
ふと、話を一区切り終えたところで次の話題を探す。今という走行中のここは非条理に暇、
それと、話と言うより、コントだ。
「う？」
カラオケボックス並みの広さを誇る個室の注意書きに目が止まる。
そこには、まめに注意が淡々縦に並んでいた。一覧する限りだと、

電波や電磁波を遮断する為電子機器は、使用する際不具合が生じますと、目立たない程度に記載されていた。

その注意事項を読んで、ケータイゲームを弄り、無我夢中とばかりに、扱っている子子子さんに訪ねてもた。

「あの？子子子さん、携帯電話に電波が入らないそうでして、常こまめに通信を行う重いゲームは出来ないそうですよ？」

と、何故かしらゲームが出来てしまっている子子子さんと子子子さんのケータイに訪ねてみせたヒトトキ。

丁寧こそ、自然に成ってしまっているのだが、奇抜でいびつな何かの空気にそうさせられてしまった。意味不明。

「ふん？ああ、そのこと、その答えはね…アプリなの、」

そうなるほど、へーそうなんだ。てっきり意外と腹黒い子子子さんだから重みの有るゲームでケータイを虐めているのだと思ったけど、違うみたいだ。

ただのアプリをやっているらしい。アプリとは多分、携帯電話機能の何かなのかもしれない。俺、結構こう言うの疎いから、…憶測とかそう言うで『おサイフケータイの様なもの』と認識すれば良いのかも。

「普通車内とかで、ケータイは禁止…な筈なんだけれど、個室とかそう言う理由がうまい具合機能しているのか、それとも、ケータイ自体使えない使用だからか…真相は分からないけど」

意味とまとまりのない。言葉たち。

「非常ベルや非常脱出窓口ならそこにあるけど？」

「なんだよ、別に、非常とか、異常とか、全然関係ないよね、今の会話から」

ケータイを弄りながら、貴女のような振る舞いで足をクロスさせる。別に似合わないが、ギャップがうますぎる。

「チキンとシーチキンが虐殺しだした。」

「何の話しだよ」

「ケータイ」

「ごめん。ケータイはあまり使わない主義でして疎くて…」

なにも響かない。無音のセカイ、それがここ、動く個室だ。どこの誰が造ったのか、教科書にも載っていない。誰かが造ったのか、そう言うことだ。

空間を走っているんだよ、今は。

「権力者ね。私…」

「うわー、子子子さん。しっかりしてよ！取り付かれてるよ！何かに」

ますます、子子子は腹黒さよりも、黒く黒く淀んだ人間に成っていって上昇している。

だから、俺はわめいてしまった。

「なによ、もう、変な声出さないで、」

「そうなんだな、よし、そのケータイが悪いのか！！壊してやる。」

壊しに取りかかることにした。もちろん本気、だって、理不尽過ぎるほど、気まずいんだもの。

「止めなさい！ヒトトキくん」

「止めない！絶対やめない！」

勝敗は一瞬だった。女の子相手に本気を出すあたり、俺らしいだろうな。

言うまでもなく、考えもなく、ケータイを奪った。

「そんなものがあるから、世の中おかしく狂うんだよ！こんなもの、」

暖かい人肌の温もり感じる、そして、意外と無機質な装飾品着飾らない理想の形態を保ったままのケータイを天高く、持ち上げる。

「やめてよ！それ大事なものなの、壊さないで…」

異性の弱々しい姿を観るのはたまらないものだと言うが、恐ろしいほどたまらない！

「そうか気づいたぞ、それが手っ取り早かったんだ。他人の大事な物から一つずつ壊していけばよかったんだな。」

悪なら、簡単になれる。才能に勝には努力ではなく、如何様しかない。

頑張ったところで意味はなかったんだ。

自分がイカサマするような、事して、自分が汚れるのではなく、人を壊して、自分を誇示し続ければよかったんだ。

「壊すよ。あーあ、壊すとも」

「やめ…」

バシャ

リコ…

これで大正解、文句なしパーフェクト完全回答だ。

静まり返る個室列車は、一瞬の空気の入る余地無しと、清々しく淀んでいた。

大声で高笑い。

けれど、彼女は無表情だった。

ん？

よく見てみれば、ケータイは壊れていなかった、一傷ついちゃいな

い。あ、なんで？

「衝撃防止、と言うより、衝撃完全防止ね。近年の科学技術をあなどってはいけないよ？ヒトトキくん？」

壊したはずなのに、壊れていない。はじめっから、壊れなかった物を壊そうとしていたのか、俺は…

「笑えないな。笑えない…」

学校や家の事などしか、知り得ていないヒトトキは、なにも知らなかったに等しかった。

「情報不足だったって事か、…やっぱり適わないよ。このセカイ…」

変えることなど、無理。非可能。これを変えることが出来たのなら、それは、本当に『初めっからの才能』と言うわけだったのか。

「変える？あなたには、出来ないよ。他の人なら出来るかも、だけど…」

懐紙の勝負破れたりか…けど、あいつの勝利すれば不登校だろ？いいじゃ、消えれば、観たくもないし。

「ごめん。おれ、お前のこと利用してた。」

「謝らなくても、今分かったし、許よ」

許された。

古き良き本拠

個室空間列車は、無事到着した。

列車と言われるとそうでもない造形。どちらかというと、列車より劣る箱方のエレベーター。けれろどもしかし、性能は並大抵の列車の数十倍は高性能でいて、光化学技術の融合体と言える。

詳しい書斎は、俺の語彙力じゃあ、述べることがままならない。数字や化学式やら、より豊かな語原要素を駆使しないと、アルコールになぜ火が点くのか、それさえも説明できない有り様だ。

「乗り物酔いの激しい人でも、これなら、願ったり叶ったりね」

子子子は、ケータイをパタリと閉じて、田舎の空気を吸いながら、体を伸ばしていた所だった。

俺もあとから、外に出たものの、時間帯を知らずに掛け乗った船だったため、外は思いっきり夕方だった。

時間軸誤ったな〜と喧騒の字すら見あたらない田舎に呟いてみた。

元々ショートタイムマシーンの容量で作られたタイムマシーンの出来損ないは、思った通り不便で不釣り合いである。

時間が根こそぎ持って行かれたのだ。

一時間ほど、…一時間でも立派な時間だ、そしてお金でもある。

「あの、いいですか？子子子さん、俺はここでは機敏のいい優等生を気取っているのです。だから、友人として…仮に、恋人としてあ

まりバカっぽい行動は避けてくださいね？」

言ってしまったが、あかつきだ。

「なら、一層バカっぽく振る舞ってやりますよ（笑）。」

なのである。最悪災厄。気質、変人ですからね彼女。

「ここ気まずく。機貧しい人達とか、居るんでいろんな意味で飢えているから、あなたみたいな人、一瞬で拉致られますよ？」

揺さぶりをかけてみたり。

「あなたが守ってくれるから、大丈夫」

うぶ。生きてきて、そんな事を言われるのは、人種的に数種の限定された一族のみと思ってあきらめていたけど、結構叶っちゃうもんなんですね。守らないし、捨て札として捨てるかもしれないけど、

「さらっと、言わないでくださいよ。速効性のそれは耐性無いですって、あと、昨日のあれで頭、角に打ったじゃん？、大丈夫？」

さり気なく、話をすり替える。

「惚れたでしょ？」

「ギャプティー！」

ごまかしだと気づかれていた。感づかれたのか、女性の察知能力とかか。

「と言う。ウケ狙いをはばむのはやめて置いて、さぁ、生きましょ！」

「確かに、笑えない冗談半分だったな…え？どこ行くの？」

近くには、民間の間で主流な民間公園が土地の許容力を凌駕していた。

その民間公園の足を運ぶ子子子。

何を企んでるんだ？あいつ…

「いやいや、あの場面での、『惚れたでしょ？』は濃厚すぎる冗談だと思いましてですね。つまり何が言いたいかと言いますと…別に、心来る何が有ったか？と、質問されると、別に、何も感じませんでしたと答え、なぜ、驚いたの？と詰問されると、あの局面での戦況下で、ああいう、言葉を平然と言うと言う行為自体に驚かされ…」

一人、さっき有ったことでブツブツ『経』唱えるが如く。唱える有様。

「なに、してるの！早く来てくださいよ！ね」

「あ、すまない。」

言われるがままに、子子子について行くヒトトキ。

ん？なんだかんだ、よく分からない傾向で誘導されているよう予感がするがこれは、気のせい？

気のではないと、気がついたときすでに手遅れだった。

「こっちだよ！こっち！」

「はいはい、どこに連れて行く気だよ…もう」

公園とは、ベンチと滑り台とブランコが設備されているだけのみずぼらしい公園だった。だったというより、所詮、田舎町レベルだ。馬鹿にはしていない。このくらいな者だと言いたいだけ。

「みてみて、噴水があるよ」

と指を指して、水道水が出るあの飲水用のあれを指向に向ける。

「馬鹿げた行動は控えようと言ったそばからこれだ。あれは、あれだろ…」

「じゃ、私、お手洗いに行かせて貰います。」

と、言い阻み。公衆トイレへと、足を向ける。

足が地に着かないとは、思っていたがそれが原因か…

俺は、納得した表情と、それを抑制するため息と上手に釣り合わせ、何ともいえない表情で近くにあったベンチに腰掛ける。

ここも昔をよく利用した事あったな…

小学校、低学年のおれはまだまだ幼く、非条理にそして、無差別に毎日を楽しんでたっけか…

落ち着くベンチ、ただの経費削減のためのシンプルな施しを用いられた木製横長椅子。

「そう言や、今何時だっけか…」

正確な時間は分からない。と言うより、時間にマメなだけか、いつも、どこへ行っても時間に追いやられている感じだ。

時間がもったいなく感じる。
何か、もっと有効に使いたい。
が、有効な時間の浪費とは何だろう？

5時半過ぎ。

いや、もう六時と言っても過言ではない。

「曖昧でごめんな…」

何を観て、具体的な時間を知ったのか…簡単な位置付けだ。
ここから、のベンチ、回りを見渡すと、一本の棒があって、空高くそびえる棒のその最先端に時計の箱がある。

時計塔。

思いっきり、強引なで大げさな言い回しだ。正真正銘針小棒大だと人は言う。

淡々と、四文字熟語をいえる人を尊敬している俺だけど、そこから、分かれるのだろうか、勝負事で。

そこら辺は、相性が合うか、合わないかの差だろうな。

と、一つ気づいた。

「昔、俺の友達が、あの時計の隣の木に、何か彫っていたな…」

友達、昔はいた友達。

今はこの近くの中学で、呑気に暮らしているんだろう。

一歩、ベンチから勢い付けで、一本踏み出す。

「あの？何が『隣の木に何か彫ったな』なんですか？」

この思い出した直後に、子子子が不意をついてくるとは、何かあるかもしれない。

子子子はマイペースにこちらに向かってくる。拍子抜けな顔をしている。

「いや、まぁ、昔、俺の昔の友達が木に、錆びた釘で何か掘って見せたんだよ。…まだ残ってるかな…とか思ちゃってよ」

と素直に、行動の動機を伝えるヒトトキ。

「懐かしむね。いいことだと思いますよ。けど、なぜ私に、その事情を話すのですか？」

疑問いっぱいだな、発端はお前だろ？

「お前が訪ねたんだろ？」

「私は、あなたの物真似をしただけです。ギャグですよ。」

でいわでぃー、

「ふ、雰囲気に…付け込むな…いい趣味してる」

「非難と受け入れます。」

「お前十分狂っているよな。見込み通りだ」

「いきなり、狂うあなたとは違います。私は人を選んでいるので…」

「そうかい、そうかい」

頭に、タオルを載せるサトルは根本的に狂っていると言ってるようだな。消去法で…

「とりあえず、お前も観ろよ。俺の昔の友達の小学生クオリティーの落書きを…」

「わかったぁ」

かけっこのつもりか、走り出した子子子。

「一人で走っとけ。」

タワゴト

綺麗にステキ

何の変哲もないとは、予想以上に困難。

樹木に刻まれた文字とは、単なる文字ですらない、記号なのだった。

「何だ。退屈ね〜、そそるものでも刻まれてたと思っていたのに…」

「そんなものですよ。小学生の落書きなんて…」

その言う通りの理屈。小学生に、人を魅了するアートを書ける者は、そんじょそこらに居るものではない。それを只単に、証明されただけの事なのだ。

期待しただけ、増しか、期待しての萎える感情も大切だし。

「あ、ちょっと、発見した。ちょっと、ヒトトキくん、木の横に立って見せて、ちょっと出いいから…」

ちょっと、とは一時の間だけ、と言う意味を兼ねているのだろう。

親切に、指まで向けて誘導を促す。

「もう暗くなるから、下らない例えは無しだぞ？分かったか？」

と言いつつも、かっこ良く、ポッケに両手を深々と挿して、普通に歩く。

テク

テク

時間はかけない、つもりだから、素早くだな。素早く歩く。

スタ

スタ

「下らなくはないはわよ。しょうもないとかでもなくて、」

はいはい、分かってるよ。分かってるよ。飽きたらしいんだろ？

夕暮れは、暮れなずむ。やけに長い時間ここに居るようだった。

「はい、立ちました」

ビシッと、直立する。主に、俺から観て、左はのっぽさんの存在感に打ち寄せられる悪鬼。

「やっぱり、ヒトトキくんらしい…よ！」

「人の名前を馬鹿にしただろ！謝れ、俺に」

と、頭をカキカキしながら、カユそうに答えてあげた。木と来て、ぴんと来たよ。

「人と木、だろ？」

「当たりだよ。ヒトトキくんなら、テストなんてザラに、出来そうだと思うけど…今ので確信したのです！」

掴めないお人だ。読者を困らせるタイプ。

「だから、お前が必要、と言いたい。」

真剣面も、時と場合で使い分けないとな。今は真剣に。

「どゆうこと？」

「一人で勉強できないと、言いたい。」

「あ、そゆうこと…」

一人より二人だが、三人よりは独りがいいと確固付けてみる。

「そろそろ夏だ。帰るぞ？子子子」

「うん、」

夏だと言うけれど、まだまだ、梅雨が響いたこの季節、奇跡的にまだ雨の季節は襲来していないらしい。

聞かない話だが、今のご時世に及んで、天気や季節まで錯覚させることが可能になったとか、タイムマシーンのポンコツが登場しているに関わらず、

季節天候の方は、つい最近って、手順間違えすぎだろ？

俺は、子子子と二人歩きを共に歩む。

そこで話題として今の疑問を与える。

「あの子子子さん？そろそろ夏だと言ったけど、なぜ、梅雨がやってこないのですか？疑問です」

敬語や丁寧語をかすかに、煽る。

「おだててそそのかすのは止めてくれる？気持ち悪いと言うより、虫ずが走る、だよ」

「虫ずとは、胃液が出ると意味ですが、何か？」

とぼけてみせる。彼女の言葉に言霊が宿っていないから、ムカつくとぼけ方しても怒らない上、友達だからさらに怒らない。

「…梅雨さんなら、昨日会ったじゃない…」

あ、そっち、梅雨さんの事を話題に出したから、虫ずとか言ってたのか、難しい人だ。

「って、違うよ。子子子さん、梅雨は梅雨でも天候の梅雨だよ」

「え、そっちなの！？ごねんあやまる～」

ふ～。

一時はどうなるかと思ったけど、そろそろ、俺の家が見えてくるから、どうでもいいか。

「で？なに？」

「じゃあ、行きますよ。…最近天候を変えれる機械が登場したとか、言うじゃあ、有りませんか？どうして、最近なんです？もっと早くてもいいだろ！」

怒鳴ってはいない、強調したかっただけです。

ヒトトキ一行は、自動販売機の有る角を左に曲がったと頃だ。次の

角を二回曲がると、家が見えてくるのを、ヒトトキだけ知っていた。

「ダサい、情報に疎いというのは、本当だったようだね～」

「勝手に、挑発していろ。むしろ、愉快な限りだ。」

ヒトトキは、子子子さんと横隊していた歩調を少し早めエアボクシングして、可愛らしさをアピールする。つまり、調和だ。

調和された子子子は、俺を見守る。

「ぅんとね、その話なんだけど、ずっと前から、会ったんだよ。気候調整機器が…」

「へぇ～」シュ、シュシュ

「けどね、その気候調整機器は、なんだか偉い人たちに、『自然界の摂理に手を出してはいけない』と大きく扇いで揺らいだの。」

「なるほど、」

階段を上る。ここから土地柄で少し上空に上があるのだ。

「それでなんだか、色々引き伸ばし一分かった？」

「うん、…でも、タイムマシーンみたいなのは、自然界の摂理に、ってか法則自体に堂々と背いているよね。その話はどんな話？」

「それは、あれだよ。人々の進化の最高潮を観たかったんだよ。誰だって期待していたし、それに、法則は曲げでもって、自然界は曲

げてないって事で、オーケーが出たのよ。おわかり？」

「全然難しくない、辻褄だけど、凄く矛盾していない。素晴らしいよ。よくできた世界だ。反吐が出る」

それは罵っているのだ。どうしようもなく、ありきたりな世界に。いつまで経っても、人は人を試したがる末路に。

だって、それって、結局は頑張ったの発明者や発見者だけじゃないか、気安い支えだけで頑張っただけじゃないか。

寝言だけどな。

「もしかすると、もしかされると、私たちって、小さすぎるのかな？」

キャラ、ミスってるだろ。これも演技か？凄い俳優さんみっけ。

「当たり前過ぎる結論だよ。只者だな、お前も、俺も」

普通は一番だと言ってくれていた奴もいるが、俺は高見を目指す。そう決めた。

「…そうだ。夕日もう山に隠れて、見えないけど、反対側のあっち観て観ろよ。」

僕も指で指示してみた。そこには…

「え、何？……うぁ～、」

田んぼ畑が広がって、輝いていた。

「ステキ（キラリ」

「そうだろ？いつもこの風景見ているんだぜ。自慢するほどの物でもないけど…」

「畑とか、作物が生い茂っているとか、基本そりから観るより、鮮明に写って、綺麗だよぉ」

綺麗とか、ステキとかの基準が分からないお人だ。新しい子子子の顔、入手。

「面白い言葉の持ち主ですね。俺にも分けらせろ」

「あんたには、合わないは絶対」

と言われたため、すぐ近くと言うより、もう付近か、…と表す距離に家があるため、日が暮れるまで、缶コーヒーでも買って、子子子さんの機嫌でも取るとするか…

「ちょっと待ってね。子子子さん、コーヒー家から取ってくるよ。」

「コゥヒー苦い。」

「なら、ミルクティーで」

「甘えて、ミルクティーでお願いぃ」

走り出したと言うより、置き去りにした。

わずかに振り向くと、ケータイをいじっていた。

ミルクティー

家に、ミルクティーと言う王道は無かった。
一般的にもほどがあり、ここはもう手遅れと開き直るくらい、古ぼけた我が家である。
内装は、普通で、全体的に木造住宅が想像できる。
この時代ならではの貧しい言えといえる。いや、時代遅れなのか、時代に追いつけない孤立した風格を貧しいと言うのか、言うのだろう。
現に、全くお金がなくて親父は一生懸命、家計を支えるための仕事をしているのだから。
母は、俺が小学校低学年に他界した。

「おい、親父。ミルクティー見当たらないんだが？」

親父は、玄関前でぐったりしている、これから、今度は鉄筋工場に行くらしい。朝はソフトウェアの何とかの正社員で、夜は鉄筋工場の正社員だ。
二つも正社員を確保出来るなんて、この世らしいこの世だ。

「おぅ、ヒトトキじゃないか、元気していたか？」

半分眼鏡虚ろで、親父、眼鏡掛けているから眼鏡越しなんだけど、十分に目の披露が窺える。
頑張っていますね。

「元気と言うより、現金返せよ。」

よく俺のお年玉を奪ったりする。

「悪かったな。仕方いないことだ、許せ…お前の金が頼りなんだ。」

凄い働く人なんだけど、ほとんど、生活費やら光熱費やらに、手が回って、遂には、俺のなけなしのお年玉まで手を出す始末。

「謝れても困るから、ミルクティードコだ?」

ココアの粉なら有った、仕方なくココアでもって思いあまった。けど、ミルクココアの原料となるミルクがなかった。

「家は、貧しいんだ。我慢しろ、…妹の金でもって行けよ。」

妹とは、親父の妹にあたり、なんと呼ぶのか…いいや、親父の妹とでいいとしよう。名前は、白百合さんだ。

白百合さんは見込んで、この家に住み憑いている厄介な人です。家の中の人なのに、あまり顔も声も聞きません。

「いや、ちょっと、白百合さんは、苦手なんですよ。…」

父親とここまで親しげに、会話できる男児はヒトトキくらいである。

親父はクソ真面目でエリート、努力家な上体力もある。この人は、言えばすごい人だ実力を持っている、尊敬はしたくないけど…

あの憎たらしい懐紙とは違って、親父は才能がないと来たもんだ。運が悪い人、俺はそんな人には、成りたくないのだよ。

「それもそうか、なら、無き母のへそくりでも使ってろ、そして失せろ、おれは眠る！」

寝た、思いっきり、玄関、ちょっと前の木製の床に寝た。

邪魔にはならない。なにせ、ボロ家だけど、広さを十二分にある。

「へそくりか…、そうしよう。」

玄関靴箱の裏に、へそくりの白い封筒があった。前々から知っていたから、素早く屈んで、封筒から一枚、札を取り出す。

お金だ。

このプライベートでは、大雑把な父の妻は、…母なんだけど、母はへそくりを有りとあらゆる場所に隠すのが趣味だった。「銀行なんて、信用できない」と、言い。アナログこそが正義とまで言い張った。

それがこの様だ。

母の過去を語ると、母が死んだその日。

スーパーでいつもの買い物をしていたらしい。母のみがお金の管理をし、家事全般も母がこなしていた。

一人っ子な俺は、その学校で授業中に居眠りをしていた。

何が、きっかけでそうなったのか…

子犬が歩道を歩いていたんだと、勿論周りに人気はなく、母だけが

歩いていたそうだ。

そこに、バスが走って来たと、乗客はゼロ人、運転手のみ。
およそ、昼前だったため、運転手はざるそばパンをくわえていたらしい。

そして刹那。バスが子犬に、…

アナログな母は、死という物の尊さをリアルに知っていた、だからこそ、子犬を助けに飛び込んだ。

サラダ油とトマトが宙を舞う。

ガッ
　グヂャリ…

母は、子犬と共に、亡き者になりました。

「さて、子子子さんの所へ行かなくてはな」

駆け足で、外へ出た。

外は、まだ日が落ちてなかった。当然である、今の今まで、只、佇んで長々しく思い出の感傷に浸っていただけなのだから、

自答販売機はドコでしょう？

お金を手にしたヒトトキ君が次にやることと追えば、そう、自販機でお飲み物を買うことです。

「なんだか、ここまでする必然性はないと思うんだけれども…物語のサガってやつか」

誰のための物語なんだ？

ああ、子子子さんの為のか、そこ忘れたら終わりだわ。

歩いて、ヒトトキは、近所の自動お飲み物取り出し機に向かった。

ヒトトキは、急かして、急いで自販機からミルクティーとただのミルクを買った。

お釣りは、七百六十円と予想の数値。

鞄とか、家に置いてきたから、お金はポッケへ

ジャラ

　ジャラリ

慌てて向かって、子子子さんの背中とガードレールが見えた。

壁に沿っての階段で、ガードレールも壁上に沿って連なっている。

海岸沿いを思い出すが、これは言ってしまえば、稲作畑作沿いだ。

「済まない。待ったか？どのくらい待った？聞かせろ！」

デートに遅れてくる心の病んだお人の真似でお出迎え？

「別に、に三分くらいしか待っていないけど…そっちは過酷な冒険でもしていた感じね。見て取れる…」

と冷静な眼力で俺を分析。

「そうなんだぜ。過酷と言うより、めんどくさかった。ぜ、マジで」
粋のいい調子で、テンションあげる俺。その際、ほれ、とミルクティーを投げて渡してみせる。
「あんまり、気を使わなくても良かったのに…礼は返すつもりよ。」
パシ
それは是非、返させていただきたい。
「いや、入らないよ。お礼なんて、だって、かっこつけたいじゃん♪」
天の弱と名の知る言葉を知っているけど、この場合その言葉が適切なのか？
「正直じゃないのね。カッコイい。言ってみたけど…、それで十分でしょ？、…はい、二百四十円。」
と、お金が含まれると思われる左拳を前に向ける。
夕日と劇的に適した演出なため、眩しく見えた。彼女の背景は田畑だ。あと逆光ではない。順光、
「あ、いいの？…おっといけね、引っかかる所だった、」
と言いながらも、二百四十円を手に取ってしまった。
「あなたの分も、私が払いましたから」

ぐぁあああ、完膚なきまでに戦略負けだ。と言うより、相手の能力か…

場の空気を支配する。

彼女らしいけど、俺にもちゃんと、決めさせてよ。

「今回負けましたよ。俺の負けだ。」

「リベンジはしないの～？」

ふざけた口調で挑発する。あと、ミルクティー飲んでる。

「ふふ、いいね。挑発的で、俺の実力を試すと言うわけか…いいでしょう。その前に、勉強法教えて…」

俺もただのミルクを飲む。背が極端に低いわけではないけど、骨を丈夫に出来るかなって、最近意識しています。

「いいよ～」

と子子子。

切り裂く忠実

二百四十円を犠牲にして、自分自身に彼女本人のお飲み物を買った。
そして、二百四十円を返された。
お金は元の単位に戻っている。千円。
つまり、自分自身のお飲み物代を彼女本人が払ったことになるのだ。
理屈はおごりをおごられた。
以上の言葉は、特定の人には屈辱的だが、俺は特定の人間ではないので、論外です。特定の人間、プライドの高い人。
「それで、夏だから寒いし帰るって理由、どうなのよ？」
「あ、それか？、それは何にも意味はございません。」
俺たち、二人衆は、断崖とか断片とかの名所が位置づけられてそうな、盆地と田畑の境界線上のガードレールにいる。畑だ。
「意味の無いことは、口にするに値しないと、理科の先生が言ってました。」
と子子子
「意味がないこそ、喋ってよろしいと、脳村先生が言ってたぜ。」
脳村先生、土下座した先生である。学級崩壊の要の位置づけ。

「あの人、歪んでいるから、あんまり、正しいもの基準にならない。」

「基準にならないとは無責任な言いぐさ、お前だって、『遊んでなんかいません。雑巾をスリッパで叩いているだけです！』って、主張して参戦していたじゃないか！」

「うるさいわ。うるさい。あれは一種のノリよ。」

と子子子は言うも、ヒトトキ自身も極度に興味がない話と踏んで、お飲み物のミルクが切れるのを踏ん切りに言葉をせき止める事にした。

「あ、ミルクが切れた、もうお家に、帰ろうか…」

「ちょっと、人な話を聞きなさい。」

「脳村先生が『人の話は聞くもんじゃないな…へへ』とか言ってたし、いいだろよ」

とか言って、ほら、と子子子の肩をたたき、帰宅を促す。

「あの先生は歪んでるけど、そんな事は言わない人間だと思います。」

「うるさいし、しつこいな。見てみれよ、すでに辺りは真っ暗じゃないか、どうしてくれるんだよ、まったくもぅよ」

その通り、日が暮れたのだ。子子子の顔が薄暗くはっきりしない。意外にも、よく見てみれば可愛かったりして、残念な感じである。

残念とは、友達がいなさそうで、妙に俺たちに絡んでくる。出来事の発端は中学二年生の昼休みだったな。」

「しつこくて、うるさいのはもっともの褒め言葉と置けとって置くわよ。」

彼女が言ってたイメージって奴だろうな。俺には関係性無し。

「嗚呼もう、お前の顔が見えない。お前誰だよ？」

と子子子が無理やり、上着を掴むから払いのけて、さっささっさと歩き出しました。

「ちょっと待てってよ。ミルクティー、飲ましやがれ」

要するに、ミルクティー飲みきるまで待ってと言っている、彼女は飲み物を味わう人みたいです。

「…」

無言で待ってあげる俺。何？この空気。

彼女は本当に、空気をいびつな形に構築するのが大好きらしい。

お飲み物を啜る音が微かに聞こえたり、聞こえなかったり。

ぐあぁぁぁ〜

「…！？ゴミ持てってか、嫌だよ、嫌いだよ、パシるの無し。」

「パシるとは、この局面では適用外です。これは『ついで』です。」

子子子は不手際に、ミルクティーの空き缶を渡す。

「都合のいい小説になったものだ。」

「小説だからと言って、あんまり上手に、描写しないでね。グロとかエロとか。」

子子子さん心配しなさんなって、あなたの死は、優しいものですから。

「ーっと、言うことで、帰りましょう。子子子さん？俺の家の人が心配しています。あと、飯が冷めるぜ」

「飯なんて、あるのかぁ。心配しないで損をした。」

歩く歩く。ミルクティーを購入したのとはまた別の自動販売に差し掛かる。

「あの販売機で買ったでしょ？ミルクティーを…」

「なーにを言っているんだ？子子子さんあれをよーく観てごらんよ。」

なぜ、子子子がいた位置の直線上で中立のあの販売機に手を出さなかったのか…観れば分かる。

「缶コ、缶コ、缶コ、缶コーヒーしか無いじゃん。」

「エメマンとは言わないのか…」

その販売機、エナーティオル・メマインと名の知れる、知る者こそ知る、王道メーカーコーヒー製品しか、そこにはなかった。
エナーティオル・メマイン略して、エメマン。
一昨日のサトルはこれを、エフェクティリール・マメマメとか言い間違えていた。

「まぁ、これを観てると、呪われそうですね。缶コしかなくて…」

「ですねよ、俺もここで事故が起きたときは、エナーティオルの狂気だと思われ、思いましたから。」

通り過ぎる。自販機。並ぶ一色の焦げ茶色は、おぞましいもんだ。

「え!?事故とかあったの?」

「会ったというか、有ったんだぜ!」

ずっと前、確か、そう俺が小学低学年の頃だ。ん?母が死んだ。翌日じゃなかったか?

「あったは、有ったけど、もう昔のことです。」

「昔話楽しいよね。聞かせてよ。」

「忘れました。」

「ガーン」

この人、近年まれに見られるまれな人だな。大切にしよう。

「あと、意外とグチャグチャで複雑だったんだよ、エナーティオルが意外と絡んでいるとか。」

本当は、この事故人為的な何かだと、親父が珍しいくらいの確率で食事を一緒に食べた時、お茶の間で語ってた。死んだ人コーヒーメーカーの指揮官だったらしいとか。

「なに？死体が？」

「嗚呼、そっちか、…大丈夫。事故った人バイクで排水溝の溝にハマって、死にましたよ、即死だってさ。」

黙り、考え始める子子子さんのもう家の前なのに、こう言った話にしつこく、こんな事を振ってきた。

「その事件の真相、死期ナさんに聞いたら一発何じゃない？」

「うぃ？案外意外な事言うのですな。死期ナさんとは誰ですか？」

死期ナ梅雨、彼女を過度すぎるくらい嫌う子子子が上の名をなんて言うなんて…

「わかった。梅雨さんよ、梅雨ちゃん。」

「梅雨ちゃんが？」

「死んだ。…嘘嘘、聞けば事件解決だと、言ったのよ」

ガラガラ

戸を開ける玄関だ。前方には死体。

「あれ？人が死んでない？ヒトトキくん？」

「死んでません。あれは眠っているだけです。あと、紹介してみますね。俺の親父、一ノ目二時頃です。」

「二時頃？嗚呼わかった。死んだは少し直線過ぎるから、眠るように永眠ってわけで、つまり、あなたが犯人よ、ヒトトキくん。」

何を推理したのか、推理というより何かの見過ぎで頭が減数分離して、どうにか結合し損ねての案を述べて、それらしい事言って、場の空気を剥奪したというのか、素晴らしい、テクニックだ。

「親父です。生きてます。」

「ヒトトキくん？」

「はいはいわかった。俺が犯人だどうぞ、ゆるりと俺を連行しておくれよ。」

「狩った」

はっちゃけた（前書き）

でた人

一ノ目二時頃（いちのめ　二時頃）

話の中だけでた人

脳村先生（のうむら

白百合（しらゆり）

はっちゃけた

「私からケータイ取り上げたら、何が残るって言うのよ？」

「愛と希望が残ると思います。」

正直に答えよう。

「そのですます口調やめて欲しい。」

「そっち重要視かよ、…分かった、だったら、いかにもエリートって模様を強調させたかったのだが、普通にするよ」

何より、ケータイ電話はこの家では、堅苦しく持ち込み禁止令が出されているのだった。

俺の親父、二時頃のおかげだ。てんてこ舞いと大童な二時頃は重度の電磁波中毒者で機器から垂れ流れる微量の電磁波さえも、よだれが出る始末だ。末期とも言えるな。

「兎にも角にも、話がすれ変わってるし、俺が言いたいのは、親父の為なんだよ。頼む。」

「頼まれないし、女性のケータイの重要性をまるで分かっちゃい無いわよ。お前。」

お前とは、これは相当はちきれそうな赴きだな。仕方ないよね、俺には無関係。親父の為ですし、家族のためだ。お前は他人だろ。

と、言いがかりを付けてみる。

「お前は他人だろ。そして、女性だ。分かるかこの意味？男尊女卑と言われる禍々しい差別を！」

貴族らしい振る舞いでわめく俺。

「…」

無言でケータイの電源を落とす。

どうやら、ケータイの予備電源まで切っているようだ。

「これでいいよね？ヒト」

「ヒト！凄い短縮形！…これっこ無所じゃなかった。」

カッコ良く人でよかった。漢字一文字で、『人』と言う名だと、『人で無しとか』言われない。

「漢字で人ならそれでもいいが…」

「人としてなら人でもオーケーと、言うわけね。」意味わかんね。

一瞬だが場の空気が静まり返る。携帯のマナーもでもここまで静かに鎮静化出来はしない。

恐るべき空気の切り替え話術氏だ。子子子事です。

「あ、そうそう、早く中へ入ってくれよ。立ち話も疲れるだけだろ？」

「あの人、」

とここで倒れている親父を指差す。今日で指さすの二回目だ。
まるでそれは、「この人、ほっといてもいいの？」の合図だ。別に、
気にしなくてもいいのに。

「この人は、7時半くっきりに覚醒すますから、ほっといても風邪
で死んだりはしません。逆に温めて死んでしまいます。」

「ええ、分かった…」

体内時計、腕時計にも微量の電波が生じるので全て、体内時計に任
せているとか。
一昔に、『どうして、そこまで正確に時間を計れるの？』と訊いた
際、『訓練した、大変だったな～』の一区切りで事を終えた。
訓練すれば、何でも出来そうだな俺の親父は、…ある意味才能か。

「と、俺の部屋は、私物で溢れて戦争してるから、ちょっと、お茶
の間行ってて、お願いします。」

忘れていたよ。今ドアノブに手が触れていたよ。トイレのドアノブ
だったけど、

俺のヘアは、今、とんでも無いことになっていたんですよ。
何と言いますかね。エロゲまみれと言うか。別に、ただのエロゲじ
ゃなくて、素晴らしいエロゲで、感動しますし。

「え。」

「なんだよ。その何かの電波を受信したようなケータイのランプみ

たいな顔は…？」

「中、見てみたい。な～とか」

「何言ってんですか！お前は！汚い部屋を罵る道具として、罵ろうとしているだけではないのか！？」

訳せば、中学生の下心を鷲掴みにする様な物言い。
違う。こんな事実際に有ってはならないという何かの回避。

「見せてくれる？」

迫りよる。反射的に背後のドアに、背を向けもたれ掛かる。けど、俺ヘアはここではない。この後ろのドアはトイレだ。

ギギィ

木造建築の床の音。
滴る要に、近づく子子子。

「いや、待て、俺のヘアはあっちだ。ここはトイレだ、トイレ！」

もうどうしようういもないこの感じ。彼女は俺の背後のドアが俺のマイルームだと思っている、実際はこのドアはトイレだ。正直に言って、洋式の水洗トイレです。

「怪しいわ。嘘ついてない？」

「嘘であって欲しいです。」

周りは、真っ暗で虫の声も聞こえる。何せ田舎だ。電気を付けないと本当に真っ暗…この薄暗い廊下を唯一照らしてくれるのが、玄関の照明のみ。

接近する子子子さんは暗がりを利用した…言葉通り鬼のような形相で俺を翻弄する。

「退きなさい。嘘かどうか、確認させなさい。」

この人のキャラは、何だろう？理解に苦しむ。

「わ、分かりました。」

ヒョイと、言う擬音が適切だろう。それ以上正しい言葉は見当たらない。

間抜けな怠け者のように退いた俺。

正直、中、トイレです。

「のぞき見るのが私の趣味なの…ここが本当はヒトくんの部屋、だとしたら、おぞましい結末になるわね。」

とってに手が触れる。

おぞましい結末は、子子子が辱めを受けること…

「開きなさい。」

クイ

ドアを開けた。

「…」

バタリ

ドアをしめた。

同時に、表情がいつもの子子子に戻っていた。

時が長く感じた。廊下は冷たい。梅雨時期で温めて湿っているはずなのに、冷たい。靴下越しと言うのに、冷たい。

空気がほんのり、冷たい。

「…」

声が出ない。

ちゃんと立派な声帯を持っているのに、変声期で声が大人びた筈なのに…

次の言葉が出せない。

「うわぁあああぁあぁおー」

俺は背後から、酷く凍結した子子子の肩を両手で揉んだ。

「え。ちょ。なに!?」

俺はそのまま、手を握り、廊下を駆けた。

「いいもの見せてやる!子子子!」

主にエロゲ。

「…」

手を繋ぎ、ヒトトキの堂々二足歩行がままに、子子子はあとをかける。何も出来ず、ただただ、引かれる。

「ここだ。！」

ガチャリ
　ゴゴギ

当初は足で蹴り飛ばしたかったけど、まめな俺は器用にドアノブをこじ開けた。

「！」

当たり前の景色。堂々たるそれは、俺の部屋。

壁一面とは言えないが、勉強机には、エロゲの山だ。これは勉学に対する反抗を兼ねての行為、詭弁はを物語った遠まわしのアイデンティティーだ。

「やっぱり、そうだったの…」

口を開く。俺は後戻りはできない。

「前からそうじゃないかって思っていたけど、思っていなかった訳ではなかったわ。」

？

「私に関わる人間すべて、そうじゃないかって、思っていたけど、そうだったのね。残念」

何を行っているのだろう？
もしかして、エロゲのパッケージは女の子には見えないのか？
だとしたら、大画面ディスプレイのみの寂しげな。お部屋を絢爛しているのか？
サトルとゲームの話で噛み合わなかったのは、これが原因だったと言ってくれないのか？

「私のお兄ちゃんの部屋と同じだよぉ」

「うわぁあああぁぁぁ止めろ！。こんな小説観たくないと読者に言われてしまうはっちゃけ具合じゃないか！…ベットに座るな！」

凄くキラキラしたラメ入りおめめで、部屋を食べるように見回す。

はじけていいのか？

親父が子子子

先ほどの話、

「その事件の真相などなどを、梅雨に訊かせてもらいとか。その発想が思いつくお前が凄い。人間関係的に…」

「何が言いたいの？私はただ、真相が知りたいのなら、それが最前だと言っているだけです。人とととしては嫌いだけど、能力は認めているつもりだけど？」

「ふーん、人間性にはよくできているんだな。お前。」

「当たり前よ」

俺たち、は、とりあえずやることもないので、俺の部屋で話し合いをしていたと言うことだ。

二時頃のオヤジはまだ爆睡中で、睡眠から目覚めの時を迎えるのはあと十六分ほどと観ているつもりだ。

電化製品等は、また他の場所に隔離しているため、アナログ時計と言った物まで、回収される有り様だ。

…

しかし、電化製品等はオヤジのアレルギーで隔離されてるのだけれど、一番身近な蛍光灯は許されるらしい。

なぜ、蛍光灯だけ？と聞けば、気合いと努力だと言う。初めから、

そのご自慢の努力と成長力でどうにかならなかったのか…とつくづく思ったりする。

まぁ、私生活には問題なく、仕事場では汗水絶やして、アレルギーを逆利用して、せっせせっせと働いているんだから、全体的に何でもないんだろうよ。

「それとあの人、…あの倒れてた人、二時頃お父さんだっけ？、本当に死んでいるんじゃないの？冷たくなってたけど、」

「親父は冷たくならないし、もし、冷たくなっててもお前がいつ脈をはかったのか？の疑問が後押しして、無効だ。

そう、今の時系列では、俺が部屋を招待して、そこから、ずっと、部屋から出ていない。つまり、通り過ぎた親父の死体の脈を確認することの方が無理ってことですよ。俺の目は盗まれないからな。

「あ、電気つけるの忘れていた。」

カチ

「外は真っ暗ね。7時半前だというのに…」

さり気なく行動の早い子子子は、すかさず、窓を開けた。子子子行動パターンは読めないな。

「なんで、窓を開けるんだ。無視が入って来るじゃないか！ここ一階だぞ！」

一階でした、二階も存在するけど、そこは電化製品の隔離場で、電

化製品共々が喜んで集団生活を楽しんでいるのだ。

冷蔵庫とテレビが一緒に、暮らしているんだぜ。そそるだろ？

「あ、そうだ。そろそろ夕飯の料理の時間だったな、俺、仕込みしないといけないから、エロゲやっといて待っててて、」

7時半前、この時間はいつも、二階から材料を調達しているんだよ。親父は、電磁波症候群で電化製品が食べ物に見えるらしいから、俺がいないと何も出来ない。

俺が何もしなければ、親父は仕方なく、付近のコンビニで事を済ましそうとするが…コンビニもまた電化製品パラダイスな訳で、餓死して死んでしまう可能性が大いにあるのだ。

「わかったぁー」うきうき

うきうきする事か？

まぁ、彼女の趣味は男性から女性に向けての俺で、エロゲをやるのだろう。

俺は制作側の気持ちになってゲーム無礼しているけどね。

ふふ、まだまだ初心者だな。彼女のディスクの扱いが不器用だ…謝って割ったとしても許さないと言って、許してやる。

子子子はそれは、まるで氷を乗せたビスケットを運ぶように、パソコンの挿入口にそれを叩き込んだ。

キュイィウン

「きゃ」

よしよし、しっかりやってるな。
俺は冒頭だけの子子子とエロゲのやり取りを伺えて、ドアを閉じる。
ここからの俺はいつも通りの俺で、階段を使って二回から食糧取る俺だ。二度三度言ったかも知らないが食料品を台所に運ぶのが俺の役目である。

だん
　だん

ガタ
　ガチャリ
　　ドスゴソ

「このくらいか。…贅沢な一品は作れそうにないな…ま、子子子がいることだし、これでも許せるか…」

寂しく親父と二人で食事をしていた毎晩は憂鬱だったな。それが原因なのか、叔父とは誰より、距離が近い。
親子仲がいいのは、いいことだが冗談がすぎると笑えない。

現実的に、一緒にお風呂に平然と入ったりするのに抵抗がない俺も怖い。
受験生なので今年はまだ一度も…。
小学校までだったけどね。

「キュウリとトマトがあるな…今日は、サラダとオムライスでいく

か、」

王道が俺の本質。特に料理に関しては、親父より頑固。子供と同じ味覚のこだわりだ。

ガサガサ

死体が動き出したか…

あの体制だと、ゴキブリと同じ動きをするであろうな。

子子子が手洗いしに行く際、あの動きぶりを見たら、奇声を発するに違いない。確信だが空想上のみだ、実際にはあり得ない。

俺は、死体、曰わく親父の様子を拝見するべく、ボウルにありったけの食料を詰めて階段をおりた。…

その時だった。

「きゃ」

小さな悲鳴と物音が俺の聴覚に伝わった。

階段の足場、急ぎたいにも足がもつれるように、段差の魔の手が襲いかかる。

言うまでもなく、急いだらこけるから急がないだ。

単に急ぎたくないと、直訳してもいい。

「どうした〜ゾンビでも観たのか？〜今日は眠れないな〜」

などと、急ぎたいのも山々に、声だけ冷静に、発した。状況把握のためにな。

すると、

「ゾンビじゃないわ。ゴキブリよ。大きなゴキブリが姿を露わにしたの！」

「お～それは、災難だな。よし、今行くから待ってくれ、お茶でも飲みながら…」

お茶は、俺の部屋に湯たんぽの様な水筒がある、そして、その中にある。お茶が。
言わないと伝わらないけど、知っていると信じておくよ…『お茶とは思わないで湯湯婆として』使ってるんだと。

「お茶なんて、無いわよ～それよりどうするの？この害虫？」

と心なしに、害虫だとか言う子子子。それの害虫はおそらく俺の親父だから、絶対子子子はこの茶番終了後、俺の父親にたこ殴りにされるよ。可哀想に…

「殺虫剤なら、玄関の角にあるよ。使ってもいいよ」

とご丁寧に、殺虫剤の在処を教えてあげた。ゴキブリ扱いされる親父の子の気持ちも考えて欲しい。子子子さん…

「ごめんなさいだけど。ゴキブリがとうせんぼしてるの…だか…

「うぉおらあああぁぁぁあ～～～～」

きゃあああぁぁぁぁぁあぁ～～～～」

親父が完全起動した。

調子に乗るから悪いんだよ。
大人しく、冷静に現状把握してお茶でも飲めばよかったのに…

子子子奴、おトイレに行くときに遭遇したのならお漏らししてるぜ。
ケケ、お小水なんてイヤらしい。とかは、言わない。
多分、エロゲに飽きて、外でケータイのアプリ、遣ろうとしていたのだな。

完全にアプリ依存者じゃん。

たばこを吸わない親父だけど、煙草依存者同等アプリ依存者に、渇を入れたのだな。うなずける頷ける。

階段を降りて、左に目を向けると、

子子子が俺の父親を制していた。

悠然たる女子

何が父をおかしくしたのか、その正体の真相をあばいてくれるのが、自分の目だったりする。

「子子子さん…親父に携帯電話を向けるのは止めてくれよ。これでも、俺の父親なんだから…」

発信源ケータイ、受信源は親父、親父は凄く悶え苦しんでいる有様だ。

「分かってはいるのよね、けど、この人のいびつな動くが悪い。」

いびつな動きとは何か、そう、言われなくとも親父の起床の動きだ。正確には、寝起きの悪さだ。毛虫やミミズと同じくらい曲がりくねる。

「俺の名を呼んだか？」

「ほら、しゃべった？！」

喋らないと、病気です。その人は人ですから、喋ります。でも第一言が『俺の名を呼んだか？』とか笑える、ハッハッハ、多分、子子子には俺のお父さんに、『奇人』と言う名称が称えられたな。

ここは俺がバランスを取らないと…

「お前の名を呼ぶ奴なんていないよ。お前の名前は二時頃、俺の親父だろう？毛虫に似た動きは止めろ。俺の彼女が怖がってるじゃな

いか、どうしてくれる？」

設定だと、子子子は彼女で家は火災で全焼し、路頭に迷っていたから、家に紹介したって設定だ。ん？
設定だ。

「ああ、そんな理由か。そんな理由で、ここに女子高生みたいな中学生があるのか。なるほどな、言えに招待とは、…そこのおなごよ。よろしく」

理解が早い人だから、答えるのも早い。
頭から首にかけて、おかしな感じに寝ていたのだから、首が痛いって、悲鳴を上げている親父。
つまり、寝違えた親父。

「あの？私の話訊いていただけます？」

「ん？なんだ？」

「どうした？いきなり」

場の空気が一気に均等化する。すごい人、あいや、性別の問題か。
女性にできる特権てやつ。

「あなた達、言葉の個性が曖昧で、誰が誰だか分かりません。ちゃんと、個性を用いてください。言葉にも！…じゃぁ、私失礼します…」

子子子さんは、トイレに向かいました。と言うより、トイレに駆け込んだ？う～ん、難しい表現技法だ。

これだから、日本言語は難しくてままならない。

「…」

しんみりする空気。俺は片手にボウルを携えている。

「というか、まず、夕飯を作ろうか。このままでは俺、仕事に遅刻だ。」

仕事に遅刻するは正しい方か？お茶目に聞こえるけど…

深夜の部は、土木関係で近代的な土足二足クレーン車を操縦してるらしい。

工事中の現場を生でまた事はないが、たまに、学校に通勤するとき、停止中の現場を見かけたりする。

「そうですね。ついでに、俺も、自称を僕にします。」

「そりゃいいな。お前、俺とか言う顔つきには見えないし、それで充分だろ？」

僕、初めは俺、こうなる役目だったのか。僕は僕で、俺は俺…ふむ。僕は気にったかんじだな。名前もヒトになったし。

「親父。今日から僕を、『人』と読んでくれ、僕の名前を考えたのは、親父だったはずだろ？だから頼む。」

「何だ？今日は世界奮闘の祝日か？お前の中で何かが変わったのか？父さん嬉しいよ。…嘘だか、本当だか知らないが、俺のタイプではないおなごまで連れてきて…反抗期だろ？」

凄い言葉数、今日はましてやけに、親父が寂しく見える。
錯覚で有ってほしいが、これも親離れの一種の現象なのであろう。
「タイプではないか。…確かに言えている、…さて、行くぞ。父さん」
さっきから、正座で廊下に、座っていたお父さんは、『よっこら』とかけ声を交えて立ち上がり、俺の後をついてくる。
一段落ついた、僕達だが、まだ一つ言いたい事がある。
それは…
「今日はチャーハンにしようか、オムレツにしようか迷ったけど、結局、サラダとカレーにしたよ。」
オムライスは…あれは単なる妄想でした。
「なるほど、カレーか、…お前らしい食品選択じゃないか、昨日はそば味噌汁で今回はカレーで、明日もカレーで決まりだな。」
明日もカレー？おかしな話をする、普通の人間なら明日は、ピザ味噌だろ？
「カレーカレーって、親父忘れたのか？」
「ん？何をだ？」
台所に到着。とてもじゃなくて、物凄く台所までの距離が遠い様な気がした、気分の問題かな？ひどく蒸し暑いし…

「僕たちの作る料理は、ぴったり、二人分だった筈でしたよね？」

「ああ、そうか。参ったな、彼女を忘れていたな。」

「白百合さん生きていますかね？」

この家は、四室部屋がある、一つは僕の部屋、もう一つは親父と母親の寝室、それから、電化製品の部屋、最後に親父の妹の部屋。どうでもいいけど…

明日もカレーとは言ってくれるけど、それは…カレーを必要以上に作ったときだ。

僕たちは、丁度その日の分量しか作らない。

「あいつは生きているよ。通販と一心同体とも言って言い、なにせ、俺の妹だぞ」

あの人が通販と生命共同体ってことは大昔に知っている、ただ、親のすねをかじっていないからと言って、人生を捨てるなんて行為は流石に引ける。

「ああ、なに食っちゃべってんだ。俺らは！さっさと、すませるぞ。あと二時間しか時間がないんだぞ」

二時間、仕事までの時間。

「それもそうですね。早く終わらせましょう」

家事までもこなす親父某二時頃さん。僕もそれらしいスキルは、持

ち合わせいるんだけども、親父には勝てない。
親父の繰り出す、手慣れた手捌き。圧倒されるの他の言葉を見当たらない。

けれどもそれは、圧倒されていては、僕も加勢出来ないって事で、とりあえず、僕もがんばってみる。

完成

完成されたのは、カレーとサラダ。
煮込む時間を最小限に抑えた為、味は期待されない代物になってしまった。
最短テクとは言ったが、言ったまでだ。現実は甘くはない。

「ふ、人参がまだ生焼けだが、そこをどうにか、サラダで誤魔化しているって事情だな。仕方ないこった。」

食卓には、レトルトカレーの劣化版が囲む。

「じゃぁ、僕、子子子さん読んでくるから、寂しく独りで食べといてよ」

コクリと腕を組み、足を組み、椅子に座る親父をみた。相当さもしそう。
この人がパソコンを扱う所なんて観たくない。イメージと株が下がる、如何にも頑固そうなんだもの。

「と」

廊下をばたりパタリと、足を進める。

擬音が耳に残るが、…それがどうした。
まず、始めに確認したい場所。俺の部屋だ。あれから三十分以上も待たしてしまった、詫びはどうとろう？
勝手にお風呂でも入って、エロゲでもやってりゃ、そんな事はやらないてもいいし、それに友達だから大目に観てもらえるだろう。と、そんな考えは、ダメだ。人として。
だから尚更、どうすれば…
ガチャリ
「お邪魔しまーす。」
ほんのり、慎重に自分の部屋に入った。
自分の部屋だというのになんて、姿だ。
「あれ？お元気だったの？ヒト君？私は元気だったよ。」
そこには、俺の私服を着た、子子子。
「おいおい、勝手に僕の服なんか借りていいのか？それに、僕の家の風呂場の備え付けのシャンプーなんて使っていいのか？あれ男性用だぞ？」
一つ、説明不足だったがパソコンから出る電磁波は親父には無効らしい。なのでパソコンだけは思う存分使わせて頂けています。
「そんなの関係ないじゃん？あなたの所為だし、それに、あなたの所為だし」

「二度言うなよ。罪悪感がしたたり満ちてしまうじゃないか！」

パソコンに繋がれたコントローラーを握る子子子。

画面には、女の子。

ゴム手袋の塊

にしても、作者はでしゃばるな。肯定。
ＰＣなんて、扱ったこともないに、べらべらと寝たにしてしまうなんて、困ったものだ。

「とりあえず、夕食の支度整ったから、来いよ？子子子」

訪ねるが訪ねただけで、それより上の意味はない。彼女だって、簡単についてくる人間ではないと知っているし、何よりひねくれ者だ。

「待ってくれる？念の為、セーブくらいはしないといけないから…」

と言いつつ、手慣れた手つきでコントローラーでゲーム自身をコントロールする。

「ゲーム本体を食べるなよ？感電しするぞ？」

おどかしてみるけどこれは、寝言だ。驚くはずがない。驚いたら俺がびっくりするし、ゲーム本体もびっくりする。

ピコピコ操作音があり響き、行き渡る僕の部屋。きっと、そうだ、この部屋は何かに取り付かれて身動きできないくらい、空気の入れ替えがされていなかったんだ。
どうりで、最近頭が妙に、機能していなかったのか…

それで、その所為で最近おかしな事が起きるのか…

「食べたくなる気持ちよく分かる、だって、私もかじったこと有る

もの、ケータイを…」

なる程、道理で、地面にたたきつけても壊れなかったのか…彼女も何回か、かじったり、頭をディスプレに叩きつけたりして、壊したことがアルからそんな事を言えるのか…

納得した。そして、辻褄が合致した。

「ごめん、冗談のつもりだったけど、本気にしたゃった？子子子さん」

謝罪のつもりだ。なんだか無断で個人情報をぼったくった感じがして、さらに罪悪感が僕を襲ったりするので謝る。

ごめんなさいと、謝る。

「何か、あなたの冗談があなたの首を絞めているような予感がするんだけど、これはただの予感？それとも、ごめんとは、どういう意味？」

まばらな言葉並べが僕を特攻攻撃する。

この場合の答えって何？わざと混乱させてるの？

それともボケか？

子子子の空気中に気があるのなら、その気の質感を、全く異質の物に変える力を持っているのかも知れない。

押しつぶされそうだ。

「異質の予感だと思います。…あ、風呂場分かったんだ。」

風呂場の位置など教えていない、けれども、こんな木造住宅、一歩

きすれば、簡単に見つかる、多分この人も、それ同等の行為を怠らずに勤しんだ結果であろう。
風呂場を手に入れた。

「私も分かりませんでしたわよ、探しに散策したけどね。心配になったりして、本当にこの家に生活最低限の設備が整っているのかどうか、不安になったり、でなかったりして。」

「はいはい、お見逸れいたします。説明しなかった僕の所為ですごめんなさい…はい、夕食だ早く来い」

もたついている時間は、そう長くはない、反面的に些細な事でも、その時間は失っている時間なので、質の形が悪い。

早くしなくては、美味しいはずの夕食だって冷め切ってしまう。
暖かいと美味しく感じる錯覚が味わえないだろうが…よ。

「ごめんね、今、ゴム手袋の指先の部分がこう…絡み合ってるかのように、絡んでいるコードをどうにか、綺麗に整えたい。願望なの、願いなの」望みなの

これはなんの、企みなのだろう？
僕に冷めたカレーでも食べさせるおつもりなのだろうか？
…けど、そうだとするのなら、彼女も冷めたカレーを食べることになる…
ん～
あ、

「もしかして、子子子さん？…猫舌だったりしますか？」

「なぜ分かったの！？」

「だってあれですよ。あれ、携帯電話をかじったって言いましたよね？」

「うん…」

「携帯電話はかじれたとしても、『冷たい物はかじれる』もしくは、『冷めた物はかじれる』そうではありませんか？」

「もう、しょうがないわね。私が悪かったのよ。お父さんの所為なんだから！！」

口実を認めた。違います、理論です。

「お父さん…とは？」

「お父さんはね。『暑い物は食べるな！口の中が火傷したら、一大事じゃないか！』って、出来たてなんかの、ハンバーグもさましたんだょ、」

ハンバーグ…まさしく王道。冷めた肉汁なんて、考え頭で再構築するだけでおぞましい。

「わかる…わかるよ。その気持ち…つまりあなたは、お父さんに調教されたんですね？」

少し言い方違うけど、細かいことは気にしない。

「そう…なの」

子子子は弱々しく肩を落とす…てか、全体像が小さくなる。

「わかりました。今日で克服しましょう。大丈夫です。口の中、ただれても顔には傷一つつきません。安心して、熱々のカレーを食べて苦しんでください。」

皮肉に聞こえるだろうけど、苦肉を噛みしめてまでやらなくては、生態系を変えることなど出来ません。
増しては、遺伝子さえも。

「…信じていいの？…信じて死んだりしてもいいの？」

「そこまで、大きな事ではありません。ただ、カレーを食べるだけです」

言葉にしてみれば、とっても単純な言葉の寄せ集め。
人は無責任だとか、心がないとか言うけど、変える力に道理や正義は邪魔なだけです。
楽をする人は、そうなる様に形作られていく、そして、それは悪いこと。

んで、今回の子子子の父親も、甘えを虐げた一種の悪。こんな事言ったら人として、失格だけど、僕は一生涯、『人』です。
名前が動かぬ証拠です。

震える子子子さん。

支える僕。

そして、食卓へ。

トコトコ

食卓は、二時頃が占領しているため、空気は落ち着いている。『食事とは、家族でするものだ！』と頑固そうに言っていたけど、一人で食べるのが寂しいだけだったらしい。

先に食べてもいいよ。と言ってなかったけど、一人で食べている方が自然だと思ったが、見れば、子子子を探索した時と変わらぬ体制で保持していた。

足と腕、ここまでかって興奮するくらい、頑固に組んでいる。

親父もまだまだ若い、ひねくれて、彼女とか言った人と、一緒に父親交えて、食事をして気まずくさせてやろうぜ。とか、思ってその行動に移している。

手強い敵だ、申し分ないけど、無効です。

彼女じゃありません、友達です。

しかも、気まずくなるのは父親の方だと思います。子子子さんがいるからね。

混沌と異様を逆撫でる子子子。

悲痛に、いい通り名、二つ名。

さぁーどうなる！？

「あの、この辺にでも、すわれよ。おなごさん。」
と父親。
「言われなくても、そうします。」
さっきまでの子子子が嘘のよう。
「いただきます。」
僕は、僕らしく、食べ物に感謝。
席に皆が出揃った所で、僕は真っ先に食にありつく。実は腹減って、いた僕。
むしゃもしゃ
「うまい！誰が作ったの？この料理…あ、僕か…」
独り言、沈黙する。
「あ、そういゃあれだ、そこのおなごさん？お名前訊いていなかったな。年も教えろ？」
子子子は俯いて、テーブルクロスの縁を見つめる。
あの親父、凄い勢いで先手をかけるな。そんな人じゃないのに、無理して…
「うまうまい、」僕ねこれ
「なんだぁ？無言かい？それはいけないねぇ、いけ好かない。」

「…」

「何か、喋ったらどうだい？…大丈夫、おじさんは怖い人ですから、安心しないで喋ってみろ？ほれ」

「…」

「カレー上手そうだな。おじさん、食っちゃうよ？」

「…」

「うおのののの〜負けました。この一ノ目二時頃、完封負けです。」

「苅った」

子子子、二連勝。
をあげる。

ゴム手袋の塊

にしても、作者はでしゃばるな。肯定。
ＰＣなんて、扱ったこともないに、べらべらと寝たにしてしまうなんて、困ったものだ。

「とりあえず、夕食の支度整ったから、来いよ？子子子」

訪ねるが訪ねただけで、それより上の意味はない。彼女だって、簡単についてくる人間ではないと知っているし、何よりひねくれ者だ。

「待ってくれる？念の為、セーブくらいはしないといけないから…」

と言いつつ、手慣れた手つきでコントローラーでゲーム自身をコントロールする。

「ゲーム本体を食べるなよ？感電しするぞ？」

おどかしてみるけどこれは、寝言だ。驚くはずがない。驚いたら俺がびっくりするし、ゲーム本体もびっくりする。

ピコピコ操作音があり響き、行き渡る僕の部屋。きっと、そうだ、この部屋は何かに取り付かれて身動きできないくらい、空気の入れ替えがされていなかったんだ。
どうりで、最近頭が妙に、機能していなかったのか…

それで、その所為で最近おかしな事が起きるのか…

「食べたくなる気持ちよく分かる、だって、私もかじったこと有る

もの、ケータイを…」

なる程、道理で、地面にたたきつけても壊れなかったのか…彼女も何回か、かじったり、頭をディスプレに叩きつけたりして、壊したことがアルからそんな事を言えるのか…

納得した。そして、辻褄が合致した。

「ごめん、冗談のつもりだったけど、本気にしたゃった？子子子さん」

謝罪のつもりだ。なんだか無断で個人情報をぼったくった感じがして、さらに罪悪感が僕を襲ったりするので謝る。

ごめんなさいと、謝る。

「何か、あなたの冗談があなたの首を絞めているような予感がするんだけど、これはただの予感？それとも、ごめんとは、どういう意味？」

まばらな言葉並べが僕を特攻攻撃する。

この場合の答えって何？わざと混乱させてるの？

それともボケか？

子子子の空気中に気があるのなら、その気の質感を、全く異質の物に変える力を持っているのかも知れない。

押しつぶされそうだ。

「異質の予感だと思います。…あ、風呂場分かったんだ。」

風呂場の位置など教えていない、けれども、こんな木造住宅、一歩

きすれば、簡単に見つかる、多分この人も、それ同等の行為を怠らずに勤しんだ結果であろう。
風呂場を手に入れた。

「私も分かりませんでしたわよ、探しに散策したけどね。心配になったりして、本当にこの家に生活最低限の設備が整っているのかどうか、不安になったり、でなかったりして。」

「はいはい、お見逸れいたします。説明しなかった僕の所為ですごめんなさい…はい、夕食だ早く来い」

もたついている時間は、そう長くはない、反面的に些細な事でも、その時間は失っている時間なので、質の形が悪い。

早くしなくては、美味しいはずの夕食だって冷め切ってしまう。
暖かいと美味しく感じる錯覚が味わえないだろうが…よ。

「ごめんね、今、ゴム手袋の指先の部分がこう…絡み合ってるかのように、絡んでいるコードをどうにか、綺麗に整えたい。願望なの、願いなの」望みなの

これはなんの、企みなのだろう？
僕に冷めたカレーでも食べさせるおつもりなのだろうか？
…けど、そうだとするのなら、彼女も冷めたカレーを食べることになる…
ん～
あ、

「もしかして、子子子さん？…猫舌だったりしますか？」

「なぜ分かったの！？」

「だってあれですよ。あれ、携帯電話をかじったって言いましたよね？」

「うん…」

「携帯電話はかじれたとしても、『冷たい物はかじれる』もしくは、『冷めた物はかじれる』そうではありませんか？」

「もう、しょうがないわね。私が悪かったのよ。お父さんの所為なんだから！！」

口実を認めた。違います、理論です。

「お父さん…とは？」

「お父さんはね。『暑い物は食べるな！口の中が火傷したら、一大事じゃないか！』って、出来たてなんかの、ハンバーグもさましたんだょ、」

ハンバーグ…まさしく王道。冷めた肉汁なんて、考え頭で再構築するだけでおぞましい。

「わかる…わかるよ。その気持ち…つまりあなたは、お父さんに調教されたんですね？」

少し言い方違うけど、細かいことは気にしない。

「そう…なの」

子子子は弱々しく肩を落とす…てか、全体像が小さくなる。

「わかりました。今日で克服しましょう。大丈夫です。口の中、ただれても顔には傷一つつきません。安心して、熱々のカレーを食べて苦しんでください。」

皮肉に聞こえるだろうけど、苦肉を噛みしめてまでやらなくては、生態系を変えることなど出来ません。
増しては、遺伝子さえも。

「…信じていいの？…信じて死んだりしてもいいの？」

「そこまで、大きな事ではありません。ただ、カレーを食べるだけです」

言葉にしてみれば、とっても単純な言葉の寄せ集め。
人は無責任だとか、心がないとか言うけど、変える力に道理や正義は邪魔なだけです。
楽をする人は、そうなる様に形作られていく、そして、それは悪いこと。

んで、今回の子子子の父親も、甘えを虐げた一種の悪。こんな事言ったら人として、失格だけど、僕は一生涯、『人』です。
名前が動かぬ証拠です。

震える子子子さん。

支える僕。

そして、食卓へ。

トコトコ

食卓は、二時頃が占領しているため、空気は落ち着いている。『食事とは、家族でするものだ！』と頑固そうに言っていたけど、一人で食べるのが寂しいだけだったらしい。

先に食べてもいいよ。と言ってなかったけど、一人で食べている方が自然だと思ったが、見れば、子子子を探索した時と変わらぬ体制で保持していた。

足と腕、ここまでかって興奮するくらい、頑固に組んでいる。

親父もまだまだ若い、ひねくれて、彼女とか言った人と、一緒に父親交えて、食事をして気まずくさせてやろうぜ。とか、思ってその行動に移している。

手強い敵だ、申し分ないけど、無効です。

彼女じゃありません、友達です。

しかも、気まずくなるのは父親の方だと思います。子子子さんがいるからね。

混沌と異様を逆撫でる子子子。

悲痛に、いい通り名、二つ名。

さぁーどうなる！？

「あの、この辺にでも、すわれよ。おなごさん。」
と父親。
「言われなくても、そうします。」
さっきまでの子子子が嘘のよう。
「いただきます。」
僕は、僕らしく、食べ物に感謝。
席に皆が出揃った所で、僕は真っ先に食にありつく。実は腹減って、いた僕。
むしゃもしゃ
「うまい！誰が作ったの？この料理…あ、僕か…」
独り言、沈黙する。
「あ、そういゃあれだ、そこのおなごさん？お名前訊いていなかったな。年も教えろ？」
子子子は俯いて、テーブルクロスの縁を見つめる。
あの親父、凄い勢いで先手をかけるな。そんな人じゃないのに、無理して…
「うまうまい、」僕ねこれ
「なんだぁ？無言かい？それはいけないねぇ、いけ好かない。」

「…」

「何か、喋ったらどうだい？…大丈夫、おじさんは怖い人ですから、安心しないで喋ってみろ？ほれ」

「…」

「カレー上手そうだな。おじさん、食っちゃうよ？」

「…」

「うおのののの～負けました。この一ノ目二時頃、完封負けです。」

「苅った」

子子子、二連勝。
をあげる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1571z/

わかたして。

2011年12月29日03時52分発行